ふるさとの歴史

ー遺跡と文化財からみた府中ー

ごあいさつ

平成26年に、府中市は市制施行60周年を迎えます。上下町と合併して10周年にもなります。この節目に、府中市の歴史をまとめたものとして本誌を発行します。

今あるまちの姿は、先人たちの営みの積み重ねの上に形づくられたものです。本誌を通じて、市民の皆様には、先人たちの営みやまちの移り変わりを見つめ、歴史に思いを馳せて頂ければと思います。

まちに育まれた歴史・文化にふれることは、これからのまちづくりを進める中で、大きな役割を果たすものと信じます。

なお、本誌の刊行にあたりまして、御尽力をいただきました関係者の皆様に深く感謝を申し上げます。

平成26年2月

府中市教育委員会教育長
平谷　昭彦

表紙の写真：「上下白壁の町並み」「恋しき」
「金毘羅神社石燈籠」「国府体験衣装」

＊この本は、文部科学省「公民館等を中心とした社会教育推進支援プログラム」事業により作成しました。

目 次

府中市の歴史

❶ 日本のあけぼの ―― 02
上下屏風洞洞窟遺跡

❷ 弥生から古墳時代 ―― 03
米作りのはじまり
伊豆迫山遺跡
古墳の出現
山の神古墳群
南山古墳

❸ 国府の時代 ―― 06
古墳の終焉と備後国の誕生
律令制度の確立
備後国府跡とその調査
常城
前原遺跡と古代山陽道
青目寺跡
国府の衰退
武士の時代へ

❹ 中世から近世まで ―― 15
南北朝時代の動乱
有福城と青目寺
八尾山城と守護山名氏
上下の臨済宗寺院
中世の石造物
上下代官所
石州街道
上下銀と上下の町並み

❺ 近代のあゆみ ―― 22
上下の町並み
旧芦品郡役所庁舎
福塩線の開通
工業都市府中の萌芽

関連年表 ―― 29

府中市の指定文化財 ―― 30

府中市の遺跡一覧・地図 ―― 38

関係地図 ―― 45

資料館案内 ―― 46

❶ 日本のあけぼの

日本にいつから人が住み始めたのかは、まだはっきりしていませんが、遅くとも３万年前には日本列島に人類がやってきたと考えられます。そのころの気候は寒冷で、約２万年前には海水面が現在より低かったと考えられ、日本列島は大陸と陸続きで、マンモスやナウマンゾウなど大型の動物がいました。人々は、岩陰や洞窟を住居に利用して、移動しながら動物を獲り、木の実などを拾い集めて食料にしていました。そして、石を打ち割ってつくった鋭い歯の「打製石器」を槍やナイフに利用しました。この時代を「旧石器時代」と呼んでいます。

１万数千年前頃には、気候が温暖となり、海水面が上昇して日本列島は大陸から切り離され、シカやウサギなど中・小型の動物が増加し、魚介類・木の実などが豊富となったことで、一か所にとどまって「定住」生活ができるようになりました。その様子は、当時のゴミ捨て場である「貝塚」からうかがうことができます。また、土をこねて焼いた器（「土器」）が発明され、煮炊きや貯蔵に用いるようになりました。この時代の土器は、表面に縄を用いた文様がつけられたことから「縄文土器」といい、この時代を「縄文時代」と呼んでいます。人々は、地面に穴を掘り、柱を立てて、草や土で屋根を葺いた「竪穴住居」に住み、住居の中央にある炉で、火を焚いて暖をとり、調理もしていました。また、弓矢につかう石の矢尻など狩りの道具をつくったり、植物の繊維で編み物を編んだりしていました。

石材の材料（サヌカイト）と石器（石匙・スクレイパー）
ホリノ河内遺跡（元町）・七つ池（本山）

－府中市で確認されている最も古い「人の営み」の痕跡は、行年遺跡（上下町階見）で見つかっています。縄文ではなく押型文という文様のついた土器です。縄文時代早期（約9000～7000年前頃）に作られたと考えられています。

上下屏風洞洞窟遺跡　― 縄文時代の洞窟遺跡 ―

広島県北東部の石灰岩地帯には、帝釈川の渓谷を中心とした約20km四方の範囲に、50か所以上の岩陰・洞窟遺跡が存在し、帝釈峡遺跡群として全国的に知られています。

上下屏風洞洞窟遺跡（上下町小堀）もその一つです。この洞窟は、上下川との標高差20～30mの位置にあり、公園の整備工事に伴って人骨が出土したことから、入口付近で試掘調査が行われました。その結果、縄文時代前期（約7000～5000年前頃）と後期（約4000～3000年前頃）の土器が出土し、当時の人々が自然にある洞窟を住まいとして生活していたことがわかりました。

また、上下町矢多田と阿字町の境に位置する扇原遺跡でも、縄文時代前期から後期（約7000年前～3000年前）にかけての縄文土器が出土しています。

上下屏風洞洞窟遺跡（上下町小堀）
〔洞窟入口は幅1.6m高さ1.1m〕

縄文土器：扇原遺跡（上下町矢多田）

❷ 弥生から古墳時代

米作りのはじまり

縄文時代の終わり頃になると、米作りが大陸から伝わり、鉄や青銅などの金属も日本列島へ入ってきました。米作りは九州から東北まで伝わり、人々の生活は、狩猟・採集中心のものから農耕へと変化しました。当初は低湿地を利用して米を栽培していましたが、後には用水を引き、水田を拡大し、生産力を上げていきました。

「石包丁」で刈り取った稲は「高床倉庫」に貯蔵され、「弥生土器」という素焼きの器で煮炊きをし、鉄からは農工具などの実用品をつくり、青銅は「銅鐸」など祭りの道具に利用されました。この時代を「弥生時代」と呼んでいます。

石庖丁
ホリノ河内遺跡（元町）出土

米作りを始めてから人々の生活は安定し、人口が増加することで「ムラ」ができました。やがて、ムラのなかには貧富の差や身分の違いが生まれ、ムラ同士が争いながら「クニ」という大きな集まりになったと考えられています。そして、クニをまとめる力をもったものが王となりました。そのころの日本列島には百以上のクニがあり、そのなかで多くのクニを従えて強大な力をもった「邪馬台国」では、「卑弥呼」という女王が占いなどの呪術によって人々を治めていました。卑弥呼は中国（魏）まで使いを送り、「親魏倭王」の印や鏡をもらったと中国の歴史書「魏志」の倭人伝に書かれています。

―府中市では、弥生時代中期から後期にかけての集落や、弥生時代後期から古墳時代始め頃の集団墓が、市街地を望む丘陵上で多数確認されています。

伊豆迫山遺跡　― 弥生から古墳の住居と墓 ―

伊豆迫山遺跡（広谷町）は、市街地の東側丘陵に立地する遺跡です。平成8年（1996）と平成12年（2000）の発掘調査で、弥生時代中・後期と古墳時代中期の集落、弥生時代後期から古墳時代の初め頃までの集団墓などが見つかっています。

伊豆迫山遺跡（広谷町）遠景

弥生時代の集落は、南向きの斜面に営まれ、竪穴住居跡が数棟見つかっています。今から約1900年前頃のもので、住居の周辺からは、当時使用していた土器のほか、「分銅形土製品」が多数出土しました。分銅形土製品は、瀬戸内海地域を中心に見られるもので、ムラのまつりの時の道具やお守りとして使用されていたと考えられています。

伊豆迫山遺跡（広谷町）の竪穴住居跡

集団墓は集落よりさらに上部の尾根上に造られていました。墓の数は約100基で、今から約1800～1700年前頃と考えられます。それらのなかには、ガラス玉や勾玉・管玉が副葬されたものや、人骨の一部が残るお墓もありました。

墓穴跡

分銅形土製品

市街地周辺では、他にも、門田Ａ遺跡・山の神遺跡（桜ケ丘）など、市街地を望む丘陵一帯でこのような墓地が見つかっています。展望のよい場所に墓地がつくられていたようです。

古墳の出現

弥生時代の終わり頃から、各地では大きな土盛り（墳丘）墓がつくられるようになり、その地方の王の墓と考えられています。墓はその後巨大化し、「竪穴式石室」に遺体を葬るとともに多量の銅鏡、鉄製の武器や農工具などが副葬されています。この墓を「古墳」といい、つくられた時代を「古墳時代」と呼んでいます。古墳のうち、「前方後円墳」は、ヤマト（現在の奈良盆地周辺）の王が中心となって、日本各地の有力なクニが政治的に結びついて出現したものと考えられています。この広域の連合を「ヤマト政権」といい、ヤマトの王は「大王」と呼ばれ、その力は東北から南九州まで及びました。大王のなかには、中国に使いを送り「将軍」の称号をうけるものもいました。古墳時代後期（約1500年前頃）になると、日本各地で小さな古墳の密集した「群集墳」が出現します。これらの古墳では、「横穴式石室」に追葬が行われており、家族を同じ墓に続けて埋葬していると考えられています。

―府中市では、周辺を広範囲にわたって統括していたような大規模な古墳は確認されていませんが、中小多数の古墳が各地に築かれており、当時の府中の様子を伝えています。

山の神古墳群　― 古墳に葬られた家族 ―

古墳時代の前半期（約1700～1600年前頃）、備後地方南部では「箱式石棺」と呼ばれる墓が盛んにつくられています。石棺という形式と花崗岩の地山に掘り込んだつくり方のため、人骨が残りやすいのが特徴です。出土した人骨を分析することで、当時の社会状況などさまざまなこと、特に家族のあり方がわかってきています。

山の神第１号古墳（元町）では、３つの箱式石棺が見つかり、第１主体には男性人骨１体、第２主体には男女の成人人骨各１体、第３主体には幼小児の歯が残っていました。人骨の形質から、第１主体の男性と第２主体の男性は血縁関係にあることがわかりました。その後調査された山の神第２～４号古墳で出土した歯の形質から、被葬者の間には血縁関係が推定されています。山の神古墳群は、ムラの首長（地域のリーダー）とその家族が葬られた墓であることが明らかになりました。

千原古墳（土生町）箱式石棺

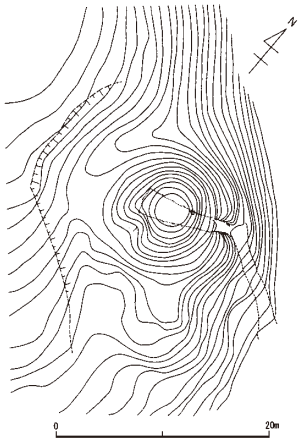
箱式石棺の中に複数の遺体が葬られている例は数多くあり、府中市内でも山の神第１号古墳のほか、同第２号古墳、用土町の城山第１号古墳などがあります。埋葬の仕方をみると、遺体の並べ方には、頭を同じ方向に向けたものと頭と足を逆さまに向けたものがあります。性別をみると、男性と女性を合葬する場合が多く、従来は夫婦と考えられていましたが、最近の研究から兄妹や姉弟など血縁関係にあることがわかってきました。複数の遺体を葬る場合は、前の遺体を整理して次の遺体を葬っており、追葬が行なわれていることもわかりました。山の神第１号古墳では、先に葬られた人骨の頭部が赤く塗られていますが、これは遺体が白骨化した段階で顔料が塗られたことを示しています。このように埋葬された状況から、当時の風習や人々の死者に対する感覚がうかがえます。

山の神第１号古墳
〔石棺内に合葬された人骨〕

南山古墳　— 地方の前方後円墳 —

南山（第1号）古墳は、上下町水永と斗升町との境の峠近くにあります。広島県史跡に指定されている横穴式石室をもつ前方後円墳で、平成3年（1991）に石室内の発掘調査と墳丘の測量調査が行われました。その成果から、墳丘は、全長約23m、後円部の直径約14.5m、前方部の長さ約8.4m、後円部墳頂と前方部墳頂の標高差2.5～3mで、墳丘の形態について、前方部が短小で後円部との標高差が大きなタイプであることがわかりました。石室規模は、長さ8.4m、奥壁の幅約2.5m、奥壁の高さ約2.2mで、石室内には、立柱状の石が突出して玄室と羨道を区別しています。遺物は７世紀前半の須恵器が出土していますが、石室の石材利用状況や庄原市唐櫃古墳に類似していることなどから、古墳は６世紀の終わり頃、約1500年前につくられたと考えられます。

その頃は、備後地域は大きく南部と北部の２地域に分かれていたようです。南山古墳に見られる立柱状の石が突出する形態の古墳は、北部地域を中心に分布していることから、南山古墳は北部地域に属し、その南端に位置していたと考えられます。



南山古墳墳丘〔等高線は25cm間隔〕

南山古墳　墳丘

南山古墳の石室内部

こぼれ話

お墓の移り変わり

弥生時代には、村人のほとんどは集団墓地に葬られていましたが、やがて首長やその家族などの限られた人が、特別に区画・土盛りされた墓に葬られるようになりました。

古墳時代には、首長など限られた人のみが大型の古墳を築造しますが、古墳時代も終わり頃になると、小規模な古墳が全国的に増えていきます。これらの古墳にはムラの有力者が葬られており、古墳をつくれる階層が広まっていることを示しています。

奈良時代以降には、墓の発見例が減っていきますが、身分関係を厳格に維持する律令国家の成立によって、葬られる人の階層が再び限られるようになったと考えられます。また、発見される墓も家族の墓ではなく、個人の墓が中心で火葬が行われている例もあります。

中世は、一部の人の墓しか残っていませんが、江戸時代の後半になると、墓石を持った墓がつくられはじめます。

そして、現在のようにみんなが墓に葬られる時代へとつながっていきます。

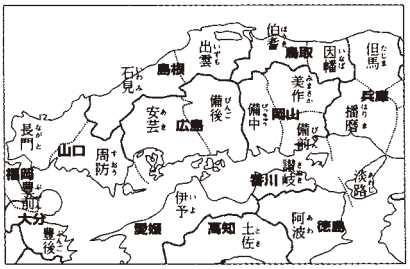
❸ 国府の時代

古墳の終焉と備後国の誕生

７世紀になると権威の象徴であった前方後円墳が造られなくなり、それに代るように仏教寺院が建てられるようになります。この頃、中国や朝鮮半島の制度を手本にして、天皇を中心とする体制づくりが進められました。奈良県の飛鳥地方が政治の中心になったことから、この時代を飛鳥時代と呼んでいます。

『日本書紀』天武天皇２年（673）の条に、「備後の国司が亀石郡（現在の神石郡）で捕獲された白い雉を都に献上した」という記述があります。「備後」の国が、記録に現れる最初の事例です。

府中市を含む広島県東部地域から岡山県にかけては、古来「吉備」と呼ばれていましたが、８世紀には備前・備中・備後・美作の４つの国（現在の県に相当）に再編成されるとともに、地方の行政制度が整えられました。国と国の線引きがどういう原理で行なわれたかよくわかっていませんが、政治的な領域、文化的な結びつきや地理的なまとまりなどが考えられます。



旧国名図

－古墳時代の府中周辺では、広範囲を統括するような「首長墓」（地域のリーダーの墓）は見当たりません。しかし、７世紀後半を過ぎると、畿内地方などに多く見られる１つの墳丘に２つの石室を持つ打堀山Ｂ第２号古墳や、畿内地方以外ではほとんど出土例がない「鐶座金具」（棺に取り付ける環状の金具）を出土した東槙木山Ａ第４号古墳など、特徴的な古墳が出現します。さらに、飛鳥地方の寺院「川原寺」や宮都「藤原宮」で葺かれた瓦に類似する軒瓦を出土する伝吉田寺（元町）が建立され、亀ヶ岳周辺には古代山城である常城が築かれたとされます。国府が設置される前段階に、府中地域に急激な変化が認められます。

時代は少し下りますが、平城京跡から出土した奈良時代初期の「木簡」の中に、「備後国葦田郡葦田里／氷高親王宮舂税五斗」と記された荷札があります。これは、葦田里（現在の府中市街地辺り）が氷高親王（後の元正天皇）の封戸（役人や貴族などへの支給地）であったことを示しています。皇族とのこのような関係も、府中における急激な変化に関わっていると考えられます。

こうした背景と、備後の南北の文化の接点、交通路の結節点であったことが関係して、備後国の国府が府中に設置されたのではないでしょうか。

打堀山B第2号古墳（鵜飼町）

川原寺式軒丸瓦・藤原宮式軒丸瓦
伝吉田寺跡周辺（元町）から出土した瓦

律令制度の確立

和銅３年（710）、奈良の平城京に都が移され、奈良時代がはじまります。当時の日本は、中国の唐に倣った「律令」制度（律：刑法、令：行政組織や税などの規定）により国の仕組みが整い、地方は60余りの「国」、その下に「郡」、さらに下には「里」という行政区が設けられました。朝廷の権威を背景に、都と各地域の間に命令や情報を伝えたり、各地からの税を集めたり、徴税のための戸籍づくりをする役所が設置され、全国の隅々まで支配するための体制が整えられました。

国府とは、国という行政区を治めるための役所が置かれた地のことで、国府には「国衙」と呼ばれる役所の建物群が形成されて、そのなかで最も中核的な施設を「政庁」（国庁）といいます。政庁は、門をもった築地塀や堀などの区画施設で周りを囲まれ、内側には正殿・脇殿・前殿・後殿などの掘立柱建物や瓦葺礎石建物が中庭（集会・儀式を行う重要な空間）を中心に規則的に配置されていました。そして、政庁の周辺にはさまざまな事務を行う庁舎、国府で必要なものをつくるための工房、物資を保管する倉庫、国府で働く役人が住む官舎、食材・食事を用意する調理場（厨）などの施設が立ち並んでいました。

「厨」墨書土器 ツジ遺跡（元町）

国府には、都から「国司」と呼ばれる役人が派遣されました。国の長官である「守」、長官の補佐をする「介」、記録や文書の審査・作成に携わる「掾」・「目」（これらを「四等官」といいます。）と、彼らを支える「史生」です。各国の面積や人口などの基準に応じて、派遣される国司の位階や人数が規定されていました。上国であった備後国の長官である守には、従五位下の位をもつ貴族がひとり任命されました。国司の仕事は、行政・司法・警察・軍事など広範囲にわたり、国司の下で約600人の職員が働いていました。また、国内の農民には、稲や農作物・特産品など物で納める税以外に、物資の運搬や兵役や土木工事・その他の雑務といった労働による税の負担が定められており、国府で労働に従事したり、都で天皇の警備をしたりする人々もいました。

－国府の所在した府中は、奈良時代から平安時代の約500年もの間、地域の政治・経済・文化の中心となり、情報・物資が交流して多くの人々が関わりをもつ場所であったのです。

復元した国府時代の衣裳

こぼれ話

今から1300年前、同じ葦田郡だった府中と上下

和銅２年（709）、葦田郡を分割して、甲奴郡が新設されたことが『続日本紀』に記載されています。これは、国府が整備されてきた時期と重なります。

分割前の旧葦田郡は、府中と上下を含み、備後国のほとんどの郡と境を接し、位置的にも備後の中心でした。また、当時の主要な道路の分岐点や交差点が、北部は上下、南部は府中に集約されていました。このような地理的な条件を中央政府が重視して、葦田郡に国府が置かれたのではないかと考えられます。

古代「備後国」の行政区分と交通網

備後国府跡とその調査

平安時代中頃に編集された『倭名類聚抄』には、「備後国のなかには14の郡、62の郷、3つの駅家が置かれ、国府は芦田郡に置かれていた」と記録されています。「備後国府」は「備後国」を治める役所が置かれた地ということですが、政庁など国府の中核施設の正確な位置については記されていませんでした。

昭和57年（1982）から、備後国府の場所を明らかにするために発掘調査が開始され、府中市市街地の各地で確認調査が実施されました。その結果、出口町から府中町・元町・鵜飼町までの芦田川北岸の山寄せ一帯に、国府に関連する遺構や遺物が集中して発見されていることがわかりました。この成果を引き継いで、現在まで元町地区を中心に調査が進められ、「ツジ・元町東遺跡」・「金龍寺東遺跡」・「ドウジョウ遺跡」など国府に関連する重要な遺跡が確認されています。

ツジ遺跡・元町東遺跡

ツジ遺跡・元町東遺跡は、元町地区を南北に流れる砂川（音無川）の東側に広がる、奈良時代から平安時代にかけての遺跡です。調査当初は別々の遺跡としていましたが、現在では一連の遺跡の広がりとして考えられるようになりました。

発掘調査の結果、多くの掘立柱建物や井戸などが見つかっています。建物施設群は百メートルほどの区画溝などで計画的に仕切られており、その区画の中で方位を合わせて配置され、同じ場所で数度の建替えが行われているといった特徴が見られます。

出土遺物としては、須恵器・土師器を中心とした大量の日用雑器のほかに、特殊で特徴的な遺物が多く出土しています。「奈良三彩」の蓋付小壺は、奈良時代にわずかに作られた三色（緑・黄・白）の陶器です。この小壺の中には、ガラス製の小玉が54個納められており、建物などを建築する前に行う地鎮の儀式に伴い埋められたものだと考えられています。他にも、「厨」（食事の用意や調理をする場所）という文字が墨で書かれている「墨書土器」や円面硯・風字硯・転用硯などの陶製の硯、役人が着用したベルトに付けられていた飾りである「腰帯具類」、印面に「賀・友・私・印」の四文字が陽刻された銅印、当時の高級陶器である「緑釉陶器」や中国などから輸入された白磁や青磁などの貿易陶磁器があります。緑釉陶器は、９世紀のはじめから10世紀の終わりにかけて、東海地方や京都府・滋賀県などで焼かれた緑色の上薬がかかった陶器です。貿易陶磁器類は大量に輸入される11～12世紀を中心とした時代のもののほかに10世紀段階の古い時代のものも多く出土しています。

大型建物跡（ツジ遺跡0203T）

奈良三彩

陶製の硯

緑釉陶器

貿易陶磁器（白磁・青磁）

腰帯具類

銅印

金龍寺東遺跡

金龍寺東遺跡は、元町地区の西端に広がる奈良時代から平安時代にかけての遺跡です。

平成３年（1991）からの断続的な調査で、礎石建物や大型の掘立柱建物などが集中して見つかっています。礎石建物は石積みの基壇を持ち、掘立柱建物には地面から直に板壁を巡らせたものもありました。また、庭園の池と見られる遺構も見つかっています。

遺物は、鳥の姿が刻まれた鬼瓦などを含む大量の瓦のほか、金属器を模倣した須恵器、墨書土器、硯、唐三彩、緑釉陶器などが出土しています。これら貴重な遺構や遺物が発見されたことから、この遺跡は「府中市指定史跡」になっています。

板壁付建物跡

石積基壇と階段跡

鬼瓦〔鳥が刻まれている〕

ドウジョウ遺跡

ドウジョウ遺跡は、元町地区を南北に流れる砂川（音無川）と金龍寺東遺跡の間に広がる奈良時代から平安時代にかけての遺跡です。

これまでの調査で、国府関連施設を取り囲むように区画していたと考えられる奈良時代の大溝が見つかっています。この区画溝は、幅約2.5ｍの２つの溝が東西方向に並行して掘られていました。この遺跡は、ツジ遺跡や金龍寺東遺跡に比べ、あまり調査が進んでいませんが、今後の調査によって、国府に関係する大きな発見が期待できる遺跡です。

ドウジョウ遺跡（元町）区画溝

市街地に広がる遺跡

昭和63年（1988）、元町地区の砂川（音無川）の西側で、都市計画街路の整備に伴い発掘調査が行われ、倉庫と考えられる平安時代の掘立柱建物や井戸などが見つかりました。柱の根元部分や井戸枠などの木材が、腐らずに当時の状態を保ったままで出土しました。また、井戸は使用を中止して埋め立てられたようですが、その土の中に完全な形の土器が多く納められていました。これは、井戸を廃棄する際に行われた儀式に関わるものと考えられます。

人形
鳥居遺跡（府川町）出土

この他にも、市街地には国府の時代の遺跡が数多く存在しています。府川町の文化センターの建設工事に伴って、鳥居遺跡から木製の「人形」が出土しています。これには人の顔が描かれており、病気など身体の災いをお祓いする儀式に「呪い札」として使われたものと考えられます。

備後国府跡の発掘調査では、国府附属工房の系譜を受け継いだ鋳物に関係した遺構・遺物が多く確認されます。また、中世には府中に「国分寺助国」という刀鍛治の一党がいたという説があり、近代金属工業の素地になった可能性があります。

以上のような調査成果は、国府に関係する施設が元町周辺に存在していたという状況証拠であり、そのうち、政庁などの国府の中心施設が明らかになって行くでしょう。備後国府は、府中の原点ともいうべき遺跡で、解明が待たれています。

常城　— 幻の古代山城 —

常城は古代の歴史書『続日本紀』養老3年（719）の条に、「備後国安那郡の茨城、葦田郡の常城を停む」として名前がでてきます。その地名から福山市新市町常および府中市本山町七ツ池周辺一帯に存在したと推定されています。

昭和42～43年（1967～68）、府中高等学校の豊元国教諭と地歴部が七ツ池周辺を現地踏査し、全国的な調査例がほとんどなかった当時としては、画期的な成果をあげることができました。しかし、各地での調査が進んだ結果、当時確認された遺構の大半は、今では古代山城に関係しないと考えられています。そして、現在も確認調査が行なわれていますが、明確な遺構は見つかっていません。

古代山城は、朝鮮半島の覇権をめぐって、百済、新羅、高句麗、唐、日本などの諸国が入り乱れ争っていた７世紀に、瀬戸内・九州などの西日本各地に築かれました。朝鮮半島の山城築造技術を取り入れて築かれているため「朝鮮式山城」と呼ばれています。

常城推定地の七ツ池周辺

今までは、白村江の戦い（天智２年（663））で唐と新羅の連合軍に敗れて以後、対外防衛のために、築かれたと考えられてきましたが、最近は、国府が存在する平野の背後にある山城について、対外防衛のためだけでなく地域支配の拠点という考え方が強くなってきています。常城も単なる軍事施設ではなく、備後国府に先行する地域支配の施設であったと捉えることもできます。

前原遺跡と古代山陽道

前原遺跡は、昭和10年（1935）の福塩線建設に伴う工事で、奈良時代の瓦が大量に出土したことにより発見されました。当初は寺院跡と考えられ、「父石廃寺」や「前原廃寺」などと呼ばれていましたが、現在では「葦田駅（あしだのうまや）」と考える説が有力になっています。駅家（うまや）説は、「マエハラ」という地名が「ウマヤ」→「マヤ」→「マエ」とつながることや、大量に出土している瓦を他地域の瓦文様と比較研究した結果から推定されているものです。

駅家とは、古代の官道に沿って一定の距離ごとに置かれていた施設で、乗継ぎ用の馬が常置されており、現在の高速道路のサービスエリアにあたります。都と大宰府を結ぶ古代山陽道は最も重要な路線とされ、外国からの使節が通ることもありました。山陽道では、外国使節の宿泊所も兼ねていて迎賓館的な性格もあったため、瓦葺き・白壁・朱塗りの柱であったと伝えられています。布勢駅（ふせのうまや）に推定されている兵庫県たつの市の小犬丸遺跡では、大量の瓦のほかに、表面に白い土が付着した壁土や赤色顔料の付着した瓦が出土しています。

前原遺跡出土瓦
〔備後国府系と言われる軒瓦〕

備後の山陽道

古代の山陽道は、現在の福山市神辺町、駅家町から府中市、尾道市御調町を東西に貫いていたと考えられますが、具体的な経路や駅家推定地についてはさまざまな説があります。そのなかで推定地がほぼ一致しているのは、品治駅（ほんじのうまや）と推定されている福山市駅家町の最明寺跡遺跡（中島遺跡）です。

現地では以前から瓦が大量に採集され、地表観察で基壇状の盛り上がりも確認できます。遺跡の南に隣接する最明寺跡南遺跡では、県道建設に先立って発掘調査が行われ、駅家を特徴付ける「国府系瓦」と呼ばれる文様をもつ瓦が大量に出土しました。前原遺跡で大量に出土する瓦も国府系瓦であるため、駅家跡と推定されています。

発掘調査の成果

前原遺跡は、平成６年（1994）から平成18年（2006）まで断続的に発掘調査が行われました。

前原遺跡遠景（朱線は遺跡範囲）

調査の結果、奈良時代の礎石建物、掘立柱建物から礎石建物に改築された建物跡、瓦葺の築地塀跡、遺跡をとりかこむ溝、山陽道側溝の可能性がある直線的な溝、建物跡に先行する奈良時代前半の溝などが確認され、全体は93～94m×75～76mの大規模な施設であることが明らかになりました。赤色顔料の付着した瓦を含む大量の瓦（軒平瓦、軒丸瓦、面戸瓦、鬼瓦）、「土馬」をはじめとする呪い用のミニチュア土製品、煮炊きに使う土器なども出土しました。また、遺跡内には古墳も確認されましたが、墳丘のほとんどは破壊され横穴式石室の一部が残されていました。

掘立柱建物については、柱穴が隅丸方形の1.2m以上の大きさで、広島県内でも最大級です。建物規模は、東西方向では柱が５本で、それぞれの間隔が2.4mずつの全長9.6m、南北方向では柱が７本以上で、それぞれの間隔が3.6mずつの全長21.6m以上になります。この大きさは県内でもほとんど調査例がないほどの規模で、「巨大建物」といってもいいでしょう。また、建物は総柱という構造をとっており、「くら」（蔵、倉、庫）や居宅など床張りのものと考えられます。さらに、東西と南北方向の柱の間隔が極端に違うことも特徴です。

このような特徴をもつ大規模な建物は、野磨駅と推定される兵庫県上郡町の落地飯坂遺跡や近江国府政庁（国府の中心施設）の東400mにある大津市の惣山遺跡などでも確認されており、官衙（役所）関連の特殊な建物であることはほぼ間違いないでしょう。

前原遺跡の「巨大建物」跡

また、この大規模な建物は、奈良時代中頃に掘立柱から礎石建物へと建て替えられていますが、この状況は、広島県府中町の下岡田遺跡（安芸駅）や兵庫県たつの市の小犬丸遺跡（布勢駅）と同様のあり方を示しており、前原遺跡が駅家であるという仮説を補強するものです。さらに、建物に先行する奈良時代前半の溝が見つかったことで、遺跡の中心部が整備された時期の手がかりが得られました。施設を整備・造成する際に破壊された横穴式石室の埋土から奈良時代の初め頃の土器が出土したことと考え合わせると、奈良時代初めには遺跡周辺が広範囲（現地形から推定すると南北約200m、東西約100m）に造成され、ついで奈良時代の中頃以降に、中心部の築地や建物が整備されたと思われます。

土馬〔病気や災害を防ぐまじないに使用〕

備後国府と前原遺跡

古代山陽道は、当時の国の中心である国府に近接した地域を通っていたと考えられますが、正確な位置はわかっていません。前原遺跡を駅家と考えた場合、遺跡の西側に山陽道が通っていたと推定されますが、平野部が狭い現地形から考えると、駅家・山陽道とも立地条件が厳しいところに設置されていたことになります。国府にとって、西の入口にあたる芦田駅は特に重要な地点であり、駅家や山陽道の設置にあたっては、駅間距離や通行の便だけでなく、国府の存在も背景として大きく影響していたと想定されます。

青目寺跡　― 七つ池周辺の山上寺院 ―

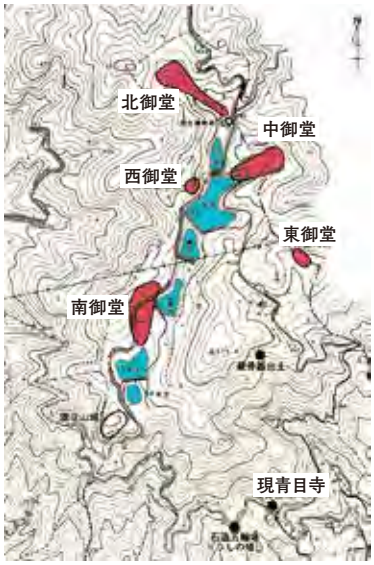
府中市街地の北方にある亀ヶ岳山頂近くには、通称「七ツ池」と呼ばれるため池群があり、市民の憩いの場として親しまれ、周辺には、青目寺跡や「常城」推定地など全国的にも貴重な歴史遺産が多く存在しています。青目寺は天台宗の寺院で、延喜年間（901～923）には、山上に４坊、周辺の山腹に11寺を従えるほど隆盛していましたが、たび重なる火災などによって次第に衰退しました。寛保３年（1743）には、現在地に焼失をまぬがれた仏像を移したという言い伝えがあります。青目寺に残る古い仏像の製作年代は、平安時代の初め頃と推定され、伝承を裏付けています。

青目寺跡は、古代山城の「常城」推定地と重複していますが、各地の古代山城には後世になって山上寺院の造られている例が多く見受けられます。これは単なる偶然ではなく、建物などを造るための平坦地が確保しやすいことや、水が豊富で当時の中心地に近接しているなど、立地の共通性によるものと考えられます。また、山城に使用されていたときの登山道や通路が残され、建物用に造成していた平坦地を活用することができ、他の場所より容易に開山できたことも要因の一つと考えられます。

昭和42～43年（1967～68）にかけて、府中高等学校の豊元国教諭と地歴部が七つ池の周辺を主に地表観察によって調査し、山上寺院が全国的にほとんど調査されていなかったなかで、画期的な成果をあげることができました。その後、平成７年（1995）以降の継続的な分布・確認調査により、各地点に中御堂･北御堂･西御堂･東御堂･南御堂とよばれる建物遺構が確認されています。平安時代の初め頃の緑釉陶器や、南北朝時代の輸入陶磁器（青磁）が出土したことで、山上の青目寺が平安時代初め頃に開基されて、南北朝時代までは伽藍が維持されていたことが確認でき、山上の寺院と中腹にある現在の青目寺が並存していたことも明らかになりました。

また、現青目寺の石垣改修に伴って事前に調査した結果、奈良時代の瓦が見つかり、青目寺の起源がさらに遡る可能性が高くなりました。さらには、宗教面で国府の機構の一部を担い、それを背景として山上に大伽藍を展開していったことも想定されます。

以下、各地点における発掘調査の成果を紹介します。



青目寺跡 御堂配置図

中御堂地点

ツツミ池（６番池）傍らの平坦面に礎石が６か所残っており、何らかの建物があったことがうかがえました。調査の結果、礎石の抜かれた跡も数か所見つかっており、平安時代の土器が出土しました。なお、背後の谷の奥には、非常に大きな平坦地があることが確認されています。

中御堂の建物跡

西御堂地点

大池（５番池）西側の山腹に平坦地が１か所あります。調査の結果、石敷きの通路が見つかり、礎石らしい石も残っていました。

東御堂地点

中御堂から、東回りで青目寺に降りる林道を進み、峠になった地点から東の山へ数百ｍ入ると、南側に延びる尾根筋があり、その鞍部を削平して平坦面が作られています。調査の結果、平坦面の中心には、石で周りを囲って一段高くした基壇が残っており、その内側には礎石が並んでいます。方形の御堂が建っていたと見られます。

東御堂の基壇

北御堂地点

口ノ池（7番池）からせせらぎ水路に沿って奥に入ると、右手の山腹に平坦地が1か所あり、さらに左手の奥にはたくさんの平坦地が広がっています。調査の結果、谷底に近い斜面に堆積した土層には多くの土器片が含まれていました。平安時代前半のものを中心に、緑釉陶器も出土しています。

南御堂地点

上新池（3番池）と下新池（2番池）の間の道路を挟んで、両側の山腹に数か所の平坦地群が確認されています。かつては井戸が残っていたようですが、道路工事で埋まってしまいました。調査の結果、13～14世紀頃に中国の龍泉窯で焼かれた青磁の花瓶（牡丹の花の文様が浮き彫りになっている）や小形の椀が出土しています。

また、石垣の並び方や積み方、地形の特徴などから、通路＝参道と推定される部分が上方の平坦地に向かって延びている状況も認められます。

南御堂　参道石段跡

現在の青目寺（青目寺観音堂遺跡）

山上の「青目寺」が衰退した後、江戸時代に亡失をまぬがれた仏像を移したと伝える寺院の境内です。石垣の改修工事に際し、石垣が江戸時代の珍しい特徴をもっているため、解体後も旧状を復元する工事を行いました。その時の確認調査で、石垣の裏込めから奈良時代に推定される平瓦が出土し、青目寺が奈良時代まで遡る寺院跡である可能性が高まりました。

現青目寺石垣の裏込め

こぼれ話

骨蔵器　― 火葬された人々 ―

奈良時代になると、「骨蔵器」と呼ばれる容器に火葬された遺骨を納めて葬る「火葬墓」が現れます。記録によると、日本で初めての火葬は道昭というお坊さんで、文武4年（700）のことです。これは釈迦が荼毘に付されたことに由来し、その後火葬は僧侶にとどまらず、天皇をはじめとする身分の高い人や貴族、官人（役人）などにも見られるようになりました。しかし、当初は一般の人々でなく、限られた人にのみ採用されていたようです。その後、都周辺だけで行われていた火葬も、次第に日本各地で見られるようになりました。これは、仏教が「鎮護国家の思想」として地方へ広められたことや、「律令制度」により中央の政治体制に、地方が組み込まれたことなどが理由としてあげられます。

広島県内では、現在まで30例余りの火葬墓が確認されていますが、府中市は特に多く見られます。伊勢地岡遺跡（本山町・府中町）、亀ヶ岳遺跡（本山町）、坊迫C遺跡（元町）、角尾山遺跡（広谷町）、ウロウギ遺跡・亀寿山遺跡（中須町）です。火葬墓の発見場所は、ほとんどが丘陵の先端部分で、市街地を臨める好立地と云えます。しかし、いずれの事例も骨蔵器の壺が偶然に発見されているだけで、蓋に使われた土器や埋められていた墓壙（墓穴）や石囲いなどの遺構は確認されていません。

亀寿山遺跡の骨蔵器

火葬墓が府中市内に多いことについては、「備後国府」の存在を無視できません。国府では、国司だけでなく周辺の人々も仏教を信仰していたと思われ、その影響で多くの官人が火葬されていたことを想像するに難くありません。県内の火葬墓を見ても、役所跡や駅家跡・寺院跡などの近辺で確認されることが多く、律令国家や仏教との密接な関連をうかがわせています。

国府の衰退

延暦13年（794）に京都の平安京に都が移され、10世紀に入るころには、朝廷が国ごとの税の徴収や土地の管理などを国司の裁量に委ねるようになり、任国を私物化する国司が現れました。そのなかで、国司の職は利権化し、朝廷や有力貴族に「志」（賄賂）を届けたり、寄付したりして国司に任命（成功）される下級貴族が出てきました。任地で実務をとる国司は「受領」とも呼ばれましたが、任命されても任地に赴かず「目代」を派遣する「遙任」国司も現れ、地方制度は形骸化していきました。国によっては、国司が暴政により郡司や住民に訴えられることもありました。

その後、国衙領（荘園以外の土地）からの税などを特定の寺社や個人（後に世襲化）に与える「知行国」の制度もおこり、土地の私有化が進みました。各地の国府調査例から、この頃の政庁は施設が簡略化していったことがわかります。政庁に代わって、国司や目代の居館が政治の中心になったためと思われます。鎌倉時代になっても朝廷は国司を任命しましたが、武家政権（幕府）の影響力が大きくなるにつれて、次第に名ばかりのものになっていきました。

－府中市では、伊豆迫山遺跡（広谷町）でこの時代の土壙墓・木棺墓が見つかり、副葬品として、土師器や刀の他、「湖州鏡」（中国の湖州地方で製作された鏡）が出土しています。湖州鏡には、中国からの輸入品のほかに日本や朝鮮で複製したものも含まれ、伊豆迫山遺跡出土の鏡は日本製と考えられます。

伊豆迫山遺跡木棺墓（SK26）

湖州鏡［径約45cm・日本製］

副葬された土器（土師器皿・小皿）

武士の時代へ

律令制度では土地は基本的に国家の所有でしたが、次第に「荘園」と呼ばれる私的な所有地が増えていきました。荘園のほとんどは、現地で土地経営していた有力農民などが、天皇家や有力な貴族・寺社に寄進したもので、税なども免除されていました。平安時代中期以降、現地で荘園を管理する「荘官」や国府の実務を掌握していた「在庁官人」、国司の任期終了後も現地にとどまり土着化した下級貴族などは、やがて武装化して「武士」となっていきます。その一部は、天皇家や有力貴族と結びつきを深め、武士団を組織していきます。その代表が「平氏」や「源氏」で、平安時代の末期には、保元・平治の乱を経て、平氏が政権の中枢を占めるようになります。

－この頃の国府や府中の様子がわかる史料は残っていませんが、備後国府の調査では、大規模な建物が集中する地域の周辺に、平安時代末から鎌倉時代にかけて小規模な建物が密集している状況が確認されています（ホリノ河内遺跡（元町）など）。鎌倉時代になっても、守護が執務・居住する「守護所」などがおかれ、町が拡大をつづけ都市的な機能が維持されていたと思われます。

ホリノ河内遺跡 建物跡

❹ 中世から近世まで

■ 鎌倉時代

元暦２年（1185）に平氏を倒した源氏が、やがて鎌倉に幕府を開きます。この幕府が置かれた地名から、以後約150年間を鎌倉時代といい、700年続く武家の政治が始まった時代になります。畿内地方の貴族や寺社などの荘園領主のもとに、各地の荘園から物資が運ばれ、人々の往来もさかんになり、交通・物流が活発化しました。この時代には、軍記物や随筆、肖像画、彫刻、建築などに特徴がある文化が生まれ、また、地方の武士や庶民に布教した鎌倉新仏教も生まれました。

坊迫C遺跡 寺院跡（鎌倉～室町時代）

■ 室町時代

元弘３年（1333）に鎌倉幕府が倒れた後に、足利氏が京都に開いた室町幕府の続いた約240年間を室町時代といいます。２つの朝廷が戦う南北朝の争いで始まり、戦国大名の争いで終わったこの時代は、朝廷・貴族・寺社の力が弱まる一方で、地域の人々は結び付きを強めて自治的な村や町を作り、社会の仕組みが大きく変わりました。

また、この時代には、貴族・武家・庶民の文化や中国の文化がまじわり、今の日本文化の基礎ができあがりました。家屋の書院造や、茶の湯、生け花、能、狂言などができたのもこの頃です。

なお、この時代の末頃には、鉄砲とキリスト教の伝来に代表されるように、日本がヨーロッパと出会うことになりました。

■ 安土桃山時代

元亀４年（1573）に室町幕府が倒れた後に、織田信長と豊臣秀吉が政権をとっていた約30年間を、信長の安土城と秀吉の伏見桃山城の名から、安土桃山時代と呼ばれます。戦国大名を平定し、天下が統一された時代です。信長は、南蛮文化と呼ばれたヨーロッパの文化を受け入れました。ヨーロッパは、世界規模で貿易を始めており、日本も世界とつながることになりました。

■ 江戸時代

慶長８年（1603）に徳川家康が江戸幕府を開き、幕府が続いた約260年間を江戸時代といいます。将軍を頂点とした幕府が全国の大名を支配し、大名はそれぞれの藩を治めていました。生産を増やすためにさまざまな努力がなされ、産業・経済が発展しました。そして、経済の発展につれて、商人など町人が力を持つようになります。200年ほど鎖国した影響で、日本独自の文化が発展し、また、長崎に来るオランダ人から西洋の科学や文化の知識がもたらされて、科学への関心が高まりました。教育の機関として、藩校や私塾が置かれ、寺子屋ではこどもたちが読み書きや計算を学びました。

－府中市では、元禄13年（1700）に上下町が江戸幕府直轄地となり、上下に代官所が置かれ、現在に残る白壁の町並みの基礎がつくられました。また、享保２年（1717）には、幕府領の一部が豊前中津藩領となり、府中市は明治時代になるまで、福山藩領、広島藩領、幕府領、中津藩領に分かれていました。

行滕町の藩境石
（左：従是西北中津領　右：従是南福山領）

下川辺の藩境石
（左：従是西芸州領　右：従是西廣嶋領）

南北朝時代の動乱

建武３年（1336）正月、足利尊氏が京都で北畠顕家らに敗れ、西走して２月に鞆（福山市）へ到着します。そこで光厳上皇（北朝）から院宣を受けて、朝敵の名を返上したのを機に九州に下り、態勢を立て直した後に瀬戸内を東へ向かい、厳島神社や尾道・鞆を経てさらに東上し、5月末には湊川（神戸市）の合戦で勝利するなど激動の年となりました。武家方有利で終結するかに見えたこの動乱も、やがて足利尊氏・直義兄弟の不和で混乱（観応の擾乱）が続きます。直義の養子直冬（尊氏の実子）が中国探題の要職にあって、当初は鞆を本拠地にしたこともあり、備後では争いが長く続き混乱していました。この時代は、日本史上での大きな変換点となりました。

有福城と青目寺

建武３年６月、津口荘の地頭山内観西は、備後守護の岩松頼宥から有福城（上下町有福）に立て籠もっている竹内兼幸を討伐するよう命令を受けました。竹内兼幸は中世備後国衙（在庁という）の役人であったとおもわれ、同年９月には、青目寺の別当（寺務統轄長）弁房らとともに、山内氏を攻撃しています。岩松頼宥は足利尊氏（武家）方の有力部将、竹内兼幸・弁房は公家方（南朝）になります。竹内氏を攻撃した武家方のなかには、長谷部氏（長氏）がいました。長氏は、翁山（上下町上下）に城を構えていた豪族です。このように、備後地方でも公家方・武家方に分かれて戦闘が繰り広げられており、一族内、あるいは近隣の者同士でも争っていました。その端緒は、南朝方の桜山四郎が吉備津神社（福山市新市町）で挙兵したことですが、伝承では上下町佐倉も桜山氏ゆかりの地と云われています。

正平17年（1362）11月、安芸の豪族吉川経政が直冬を助けるために「備後国符中」に到着したという記録があります。「府中」という地名の史料上の初見です。翌12月には、符中・宮内・矢野でも戦いがありました。動乱を経て、未だ命脈を保っていた古代的な秩序の崩壊が一気に進み、府中周辺でも、「在庁」官人という古代的な権威を拠り所にしていた竹内氏、古代以来の大きな寺である青目寺、吉備津神社などが衰退することになります。青目寺の「十一面観音像」はこの時代のものと考えられ、弁房ら僧兵がこれに合掌して戦いに赴いた姿が想像されます。

中世は、戦さや飢饉などが続き、人々が死と常に隣り合わせの時代であったせいか、仏教が庶民の間にも浸透してゆきました。府中市重要文化財に指定されている座禅堂などがある上下町善昌寺は、正中２年（1325）に当地の豪族斎藤美作守景宗が弁翁という僧侶を迎えて開かれました。

甲奴郡のほぼ中央に立地した有福城

上下の町並みから望む翁山城

青目寺の十一面観音像

八尾山城と守護山名氏

永享９年（1437）８月１日、山名満熙（持熙）は、将軍足利義教に遠ざけられていた大覚寺義昭（義教の弟）を擁して備後国府城で挙兵したものの敗れて、満熙の首級は京（平安京）へ届けられました。異母弟である山名持豊（後の宗全）が、備後などの守護を務める山名家の家督を継いだことに対して不満に思ったことが発端です。この出来事は公家たちの日記にしたためられていることから、京でも噂になった大事件だったことがうかがえます。

この「備後国府城」とは、かつて国府があった地の背後にそびえ立つ八尾山城（本山町・出口町）を指していると考えられます。八尾山城の城主については、江戸時代初め頃の書物には山名伊豆守・宮田備後守、江戸時代中頃のものには山名清氏と記されています。宮田氏は山名氏の一族で、「応仁･文明の乱」（1467～77）では、西軍の主将山名宗全に代わり八尾山城に入り、備後の西軍を指揮していました。八尾山城は守護山名氏と関わり深い城でした。

市街地から八尾山城を望む
［左：八尾山城　中央：幡立山城　右：亀ヶ岳］

南北朝時代以降、備後守護は神辺城を拠点にしたと言われていますが、実は確実な根拠があるわけではありません。例えば、暦応元年（1338）３月に浄土真宗の著名な僧侶である存覚上人が、「備後国府の守護の面前で日蓮宗の僧と宗教論争をした」という史料があり、守護が備後国府にいたことを示しています。ここでいう備後国府とは単なる地名で、他国の例でも、武家の地方支配の拠点である守護所は、多くは国衙の近くに構えられています。

備後の守護は短期間に次々と交替していましたが、15世紀に入った頃に但馬守護山名時熙が備後守護も兼ねたことから、備後守護は山名氏が継承するようになりました。山名満熙が国府城を奪取したのは、この城が守護の城というシンボル的存在であったからと考えられます。

神辺に守護所が置かれたとすれば、その背景には、古代以来の山陽道が神辺から尾道に向かうようになり府中を通らなくなったことや、国府城の事件が原因で府中から移転したと考えることもできます。伝承によると、神辺城は嘉吉３年（1443）に再築されたということです。

なお、元町の住宅団地造成工事に先立って行われた池ノ迫遺跡の発掘調査では、砦の跡が見つかり、深い堀切がつくられていました。これは国府城をめぐる戦いの時か、少し後の応仁・文明の乱の頃に築かれた可能性があります。この時代にも、武家が備後全体を支配するうえで、「府中」の掌握は大きな意味を持っていたと思われます。

池ノ迫遺跡の堀切

市街地の背後にそびえる八尾山城

八尾山城の発掘調査［東端郭］

出土した鎧の小札と矢じり

上下の臨済宗寺院

中世には戦いや飢饉が打ち続き、人々が日常的に死と隣り合わせだったせいか、仏教が庶民の間にも普及していった時代です。

臨済宗は、室町幕府に庇護された五山系と、それを潔しとしない林下系に大別されます。幕府は中国の制度にならい、天龍寺以下の京都五山、建長寺以下の鎌倉五山、それらの上に南禅寺の計11か寺を「五山」としました。五山の下に「十刹」、さらに「諸山」という寺格を設定し、幕府がこれらの寺を管理・保護しました。

備後では十刹に尾道の天寧寺、諸山に善祥寺など５か寺がありました。この善祥寺は上下町上下の善昌寺を指していると考えられます。同寺は正中２年（1325）、当地の豪族斎藤美作守景宗という人が弁翁という僧を迎え開かれたという伝承を持っています。弁翁智訥は当時の臨済宗の中で一派をなした紀伊の興国寺を本拠とする法燈派の著名な僧です。

弁翁智訥禅師木像
（座禅堂内）

諸山格を得るということは、その寺の大檀那である豪族にとって、将軍・幕府に接近できるという機会でもありました。史料に寛正元年（1460）に善祥寺住持任命のことが見られるので、その頃までには諸山の寺格を得ていたようです。その背後で、斎藤氏あるいは長氏が大檀那として奔走したかも知れません。

五山系の寺は室町幕府の弱体化とともに衰亡し、宗旨替えをして存続した寺も多く、善昌寺も曹洞宗で中興されました。

上下町有福の保泉寺、小堀の善応寺、階見の養源寺などは臨済宗永源寺派に属しています。永源寺は現在の臨済宗15本山の１つで、滋賀県の山間にある寺です。そういう立地を見ても、宗祖寂室元光が都の権力に接近することを嫌った態度が分かります。この派は林下の禅の代表的な一派です。

寂室和尚は備後とも関わりが深い人で、中国から帰途の建武元年（1334）、深津郡吉津（福山市）に立ち寄り、都に戻らず長年備後から備中・美作地方を説いて回りました。現在でも備後では、世羅郡・甲奴郡から神石郡にかけて永源寺派の寺があります。

上下町の永源寺派寺院はいずれも寂室和尚の弟子知庵元周が関わったという寺伝を持っています。この人は神石郡の永聖寺を拠点にしたといい、師の寂室和尚が中国で学んで来た教えを、早速備後の高原地域で説いて歩いたのでした。

臨済宗は、坐禅により自己の内にある仏性を見つめようとするいわゆる禅宗の一派です。当時の武士たちの多くが禅宗に魅力を感じていました。戦いという極限の動の状態の連続にあって、坐禅という静の状態を求めたのでしょう。

中世の禅堂が残る善昌寺

臨済宗永源寺派の保泉寺

中世の石造物

人々は、石を加工してさまざまなものを造ってきました。中世は、石垣の普請や礎石を使った建物が増加し、仏教の普及に伴い仏塔や墓塔が大量に造られたので、石の加工技術が大いに高まった時代でした。府中市内には、県・市文化財に指定された貴重な石造物が多く見られます。

本山町の青目寺塔婆（県指定）は、正応五年（1292）の銘がある花崗岩製の五層塔です。塔（塔婆）は、もともと寺の伽藍の中心に大きな木造建築物として建てられますが、石製の塔は供養塔として造られたことが多いようです。境内の水鉢（市指定）は花崗岩で造られた八角形の鉢で、側面に蓮華文が刻まれています。天文二四年（1555）の銘があります。

青目寺西方の山中にある「伝うしの塔」（市指定）は、その形態から鎌倉時代初期にまで遡ると考えられる五輪塔で、県内最古級といわれています。青目寺の下方に鎮座する日吉神社にも、正和四年（1315）の銘が入った宝塔（県指定）があります。元町の坊迫にも、南北朝時代頃とみられる宝塔（市指定）が残されています。宝塔は残された数が少なく、珍しいものです。これらの塔はすべて墓ですが、その主は明らかになっていません。

府川町の日吉神社鳥居（市指定）は、鎌倉末から室町時代初めに創建されたと考えられ、県内最古級といえます。宝暦十年（1760）に再建したことが刻銘されています。

鵜飼町の常福寺水鉢（市指定）には、天文十一年（1542）の銘や「尾道住大工左衛門」と刻んであり、尾道石工の作製が確認できる県内最古の例です。

上下町にも貴重な石造物が残されています。矢野の安福寺には、正平十年（1355）銘の宝篋印塔（県指定）があります。「正平」は南朝年号で、正平17年には矢野で合戦があったことも史料に見えることから、南朝方に属した地元の武士と何らかの関係が考えられます。宝篋印塔の隣りには、宝塔（市指定）も並んでいます。小塚の少林寺近くには、正長元年（1428）の銘が刻まれた宝篋印塔があります。この塔は、通称「小米石（こごめいし）」と呼ばれる結晶質石灰岩で造られ、東城町（現庄原市）から岡山県阿哲郡（現新見市）あたりで産出する石材です。製造当初は白く輝いていますが、風化とともに表面が米粒のように剥がれてしまい、銘が判読できるものは非常に珍しいです。小堀の長福寺には、天正八年（1580）銘の無縫塔（市指定）があります。無縫塔は、僧の墓塔といわれています。

結晶質石灰岩製の宝篋印塔
（藤の権現・上下町深江）

石造物も文献などとともに歴史を語る貴重な資料です。府中市の石造物を改めて見ると、比較的古いものが多いということがわかります。しかし、製造に携わった尾道石工たちの活動や、小米石製品の流通経路などはよく分かっていません。

青目寺塔婆
（本山町）

伝うしの塔
（本山町）

常福寺水鉢
（鵜飼町）

安福寺宝塔・宝篋印塔
（上下町矢野）

長福寺無縫塔
（上下町小堀）

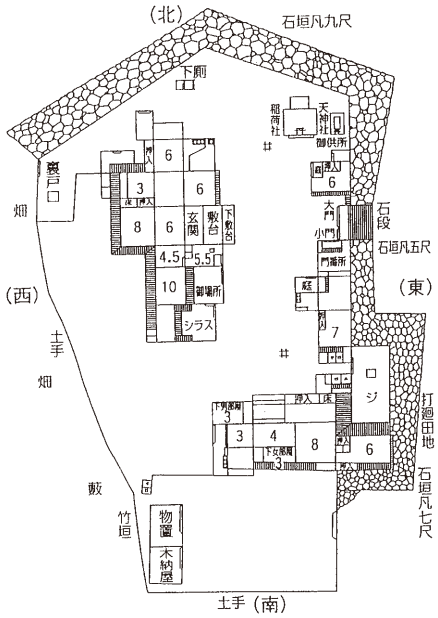
上下代官所

上下陣屋（代官所）のあゆみ

関ヶ原の戦い後、福島氏が備後・安芸を一時的に支配しましたが、元和５年（1619）からは水野氏が福山藩10万石（備後７郡と備中の一部）を治めるようになりました。元禄11年（1698）に水野氏は５代目藩主に跡継ぎが不在のため断絶し、翌年領地が再検地された結果、旧福山藩領は15万石と算出されました。（その時の検地帳は各村に控えが保管。上下地区に関係するものは市指定）元禄13年（1700）に旧福山藩領は二分され、10万石は新福山藩領（松平氏、後に阿部氏）、５万石は幕府領となりました。上下と備中笠岡には代官が置かれ、上下代官（初代：曲淵市郎右衛門）は、安那郡・神石郡・甲奴郡の計71か村（約４万石）を管轄しました。

享保２年（1717）、備後の幕府領のうち約２万石が豊前中津藩領（奥平氏）に編入されました。それに伴い、上下代官は廃止され、石見銀山大森代官所（島根県大田市）の出張陣屋に改められました。出張陣屋には、大森代官（島根県大田市、石見銀山も管轄）配下の手付・手代３～４名が派遣されて、神石郡・甲奴郡の計22か村を管轄しました。その後、幕末には神石郡・甲奴郡の13か村と備中12か村を管轄しています。

こうした代官所・陣屋の機能を維持するためには、さまざまな諸経費をはじめ公用に関する人馬等の供出（助郷役）などが必要ですが、これらは支配下の村々の負担とされていました。



上下陣屋の図
〔明治2年（1868）　数字は畳数〕

上下代官所跡の発掘調査

明治時代になり上下陣屋は廃止され、跡地には明治６年（1873）に学校（考按舎）が建てられ、その後も保育所や役場として利用されてきました。この間、昭和16年（1941）には「天領上下代官所跡」として、広島県史跡に指定されています。平成16年（2004）には府中市と合併し、上下支所として利用されていましたが、平成19年（2007）に支所が別の場所に移転し、解体工事されることに先立って、遺構の残存状況を確認するために発掘調査を行いました。

明治２年（1869）の絵図などの検討から、敷地の北側では、現在の石垣の内側に代官所の時期の石垣と石段が存在していると想定していました。調査の結果、江戸時代の代官所の石垣と石段と明治時代の学校の石段と思われる痕跡を確認しました。石の積み方から見て、検出された石垣は幕末頃に築かれ、その後石段が築かれていると考えられます。さらに、学校として利用されている頃に、古い石垣の石を再利用しながら、石段の下端の位置に合わせて新しい石垣を築くと同時に敷地を拡張しています。この工事は、明治21年（1888）に寄付金800円をかけて大改築したものの可能性があります。また、現在の石垣は、昭和の初め頃築造されたものと思われます。

代官所跡に建つ上下尋常高等学校
（明治末）

発掘調査で確認した石垣
（幕末頃か）

石州街道

江戸時代になると、東海道をはじめとするいわゆる五街道を幹線にして、それに接続する脇街道、脇往還が枝葉のように広がる交通網と、それに伴う宿駅制度が整備されました。大坂（大阪）から下関までは、山陽道あるいは中国道、西国街道と呼ばれ、五街道に次いで重要視されていました。山陽道が備中から備後に入ってまもなく、下御領村（神辺町下御領）から分かれた脇街道がいわゆる石州街道、銀山街道です。

ちなみに尾道港から山陰に抜ける出雲街道（雲石街道）も、石州街道と呼ばれることがありました。当時の街道には、石州街道や伊勢街道のように目的地の名称で呼ぶものも多く、同じ目的地に向かう複数の経路が同じ名称で呼ばれることもあったのです。

石州街道（出口町）

道標（左：上下町上下　右：府中町）

石州街道は、幕府直轄領の大森銀山・代官所（島根県大田市）に至る道として重視され、道幅が７尺（2.1m）、府中市村（府中市府中町）、上下村（同上下町）、吉舎村（三次市吉舎町）に宿駅が置かれ、伝馬人足が常置されていました。吉舎宿では出雲街道と合流し、赤名峠を経た後に西にわかれて銀山街道となり、大森銀山、温泉津港へと至りました。このルートは、大森代官所の役人などが、幕府領の年貢銀の大坂への運搬、赴任や離任、大森銀山の運上銀を大坂に運んだ帰路などのさまざまな公用に利用しました。また、石州から江戸へ送る御用蜜（大蜜）の輸送にも利用されたようです。

さて、毎年秋になると、雑税として納める幕府運上銀（石州銀、御用銀ともよばれる）と銅が大森銀山から、銀山街道、出雲街道を経て、陸路で尾道港へ運ばれた後、海路で播磨（現兵庫県）の室津港を経由して大坂へ送られていました。それに対して、吉舎から分かれて石州街道を経由して、笠岡港に至るルートも利用されたといわれています。しかし、残念ながら、運上銀が府中市村や上下村を通ったことを示す確実な資料は残っておらず、詳細はわかりません。ただし、大森銀山の産出銀を元手に、上下の有力商人に委託して金融貸付業を営ませて、その利潤銀によって減少した銀産出量を補う貸付融通の制、いわゆる「上下銀」から考えて、銀山の産出銀の一部が上下と大森の間を行き来したかもしれません。

街道は、単に人々の往来だけでなく、物資の流通にも大きく関わっていました。江戸時代に商品経済が発達する中で、府中周辺の特産品である木綿、藍、煙草など、また山陰や中国山地の産物が、石州街道を使って全国に運ばれていきました。宿駅のあった府中市や上下は、集散地としてにぎわいました。

石州街道のうち、下御領から府中市にかけては、中世や古代の山陽道とかなりの部分が重複し、また府中市から上下に向かうルートは、古代において国府と備後北部を結ぶ最も重要なルートだったと考えられます。石州街道は、古代から備後南部と北部の接点の役割を果たしてきた府中～上下が、近世にいたるまで交通の結節点としての機能を失わずにいたことをうかがわせてくれます。

上下銀と上下の町並み

江戸時代、上下の商人層は金融業を広く営んでいました。これは、代官所・陣屋が、大森銀山の産出銀を元手に、上下の有力商人に委託して金融貸付業を営ませていたからです。「上下銀」とよばれ、幕府領内にとどまらず、広島藩領・福山藩領など周辺地域にも広く及び、明治時代以降も続きました。

上下は代官所が置かれることにより周辺の政治的な中心地として、また宿場町として、金融を中心とした商業の町として発展し、現在の町並みの原型を形づくったと考えられます。

⑤ 近代のあゆみ

慶応３年（1867）の大政奉還の後、日本は明治天皇を中心とし、近代国家として歩むことになり、社会の仕組みが大きく変わりました。政府は富国強兵と殖産興業の政策をとり、欧米からの新しい文化や技術を取り入れました。近代的な工場の設置、鉄道の開通、蒸気船の運航、郵便の開始、洋服・洋食・散髪などの新しい現象が見られ、文明開化と呼ばれています。やがて、憲法が制定され、国会も開かれました。

国力が強化される中で、朝鮮の支配を巡って、清国やその後にロシアとの対立が生じ、日清戦争（明治27～28年・1894～95）・日露戦争（明治37～38年・1904～05）を戦うこととなり、その結果、台湾や朝鮮を植民地としました。当時、世界では、ヨーロッパの一部の国を中心に、各地を植民地化していました。この国々の対立から起こったのが第一次世界大戦（大正３～８年・1914～18）です。

大正時代（1912～1926）を中心に、人々の間に、民主主義的な政治への要求が高まり、労働者や農民の組合が結成され、部落開放運動、女性解放運動がおこりました。こうした政治・社会・文化面での運動や潮流を大正デモクラシーと言います。この時代には、ラジオ放送が始まり、大衆雑誌が発行されました。こうした政治や文化の大衆化とともに、生活の洋風化が徐々に広まっていきました。

昭和４年（1929）に始まった世界的な経済不況の中で、日本は中国大陸へ進出することで不況から脱出しようとしました。経済不況は、イタリア・ドイツ・日本などで、個人よりも国家・民族を優先させる体制を生み出し、やがて第二次世界大戦（昭和14～20年・1939～45）が引き起こされることになります。日本は昭和６年（1931）に満州事変を起こし、以降15年にわたって中国と戦争することになります。さらにアジア南部へ戦線を広げ、アメリカ・イギリスなど連合国との戦争に突入します。当初は勝利しましたが、戦場の拡大とともに各地で敗退し、日本本土への空襲も激しくなりました。そして、昭和20年（1945）８月、広島と長崎に原子爆弾を投下され、日本は無条件降伏をしました。

敗戦後、政治・経済・文化・教育など、広く改革が実施されました。そして、民主化の中心となったのが、国の根本的な法である日本国憲法で、昭和22年（1947）に施行されました。戦時中より、生活物資の不足などで、国民生活は苦しい状態に置かれました。しかし、国民の努力により、経済は徐々に回復しました。

1960年代に入ると、政府による経済成長優先の政治で高度経済成長の時代に入りました。国民の生活は物質的に豊かになり、技術革新もどんどん進みました。しかし、経済の発展の中で、大気汚染や公害、自然環境の破壊など、多くの問題も生じました。

1990年代にはバブル経済といわれた好景気が終わり、経済的な苦境のなかで21世紀を迎えました。少子高齢化や地域間格差など多くの問題をかかえ、将来への不安が大きくなっています。

わたしたちの暮らしぶりも、10～20年前とは随分と様子が変わりました。

今日のわたしたちの暮らしを見つめると、世界各地の動きと密接につながっていることに気づきます。こうした現代社会にあって、歴史を学びながら、一人ひとりが歴史を作る主人公であることを自覚し、世界の人々と協力して、地球の環境を守り、人々が貧困から脱して平和に暮らせるようにすることが、大きな課題となっています。

こぼれ話

田山花袋が書いた明治 40 年頃の府中市

～紀行文『日本一周』（中編大正4年（1915）刊行）「備後の山中を経て三次へ」より抜粋～

福山から府中

「川がある。町がある。織物などの出来る町である。牛の仔が何疋となく野に遊んでいる。私の志す方に山が重なりあって、（中略）やがて私の車は、通りの細い田舎町へと入っていった。
それが府中であった。煙草が出来たり、指物師（さしものし）の多かったりする府中の町だ。そこで私は一番大きな旅籠屋（はたごや）を選んで泊まった。」

大正時代の府中市街地
〔右上辺、専売局府中煙草製造所がみえます〕

昭和初期頃本通り
〔平地呉服店・備後銀行がみえます〕

現在の恋しき
〔田山花袋が宿泊した旅籠屋〕

府中から上下

「路は葦田川の谷に沿って、くるくる廻って上っていった。（中略）信濃や飛騨のように深い山という感じは起こらないが、兎に角四面悉く山であった。こけら葺きの猟師の家などがぽつねんと一軒立っているようなところもあった。木野山に入ろうとする処に、橋があって、そこに一軒休み茶屋があった。（中略）いつの間にか峠をも越えた。そこからは下り坂になる。細い谷川が一歩ごとに段々開けてそして大きくなっていく。」

上下

「いかにも海岸からはるばる山の中に入って来たという感じのする町であった。（中略）小学校があったりした。警察署が町の曲り角のようなところにあって、そこから商家の軒が両側につづいた。笠だの糸立だのを売っている家もあれば乾物類を店に並べている家もあった。―銀行と書いた大きな板が右に見えたと思うと、その隣の自転車の置いてある大きな店に車夫は梶棒を下した。」

大正7年（1918）の上下の町並み

明治末の上下尋常小学校
〔上下陣屋跡に建っています〕

明治38年翁橋
〔架換渡橋式〕

大正時代の上下本町通り
〔中央遠くにキリスト教会が見えます〕

＊田山花袋は明治時代の文豪で、「蒲団（ふとん）」という作品が有名です。その「蒲団」のモデルとなったのが上下出身の作家岡田美知代と言われています。紀行文には、岡田家を訪ねて来た明治40年頃の様子が書かれています。

上下の町並み

江戸時代、上下は石州街道の宿場町であるとともに、幕府の代官所、石見大森銀山の出張陣屋が置かれ、上下銀と呼ばれる金融業が栄え、現在の町並みの基礎ができました。明治時代においても、上下では商業・金融業などが活発に営まれ、当時の面影を町並みに見ることができます。

現存する建物で、明治時代のものとしては、上下キリスト教会や旧警察署があります。前者は、元々は商家の倉庫でしたが、戦後にキリスト教会として利用されています。後者は、後年に改築されていますが、見張り櫓は往時の姿を示しています。また、上下歴史文化資料館は、文学者岡田美知代の生家を改築したものです。

上下の町並み

翁座は、町内有志の出資により、大正14年棟上げし、昭和２年に完成した木造の芝居小屋です。歌舞伎の上演が可能な施設として設計され、芝居・映画の上演などで賑わいました。

上下商工会館は、昭和５年（1930）に上下警察署庁舎として建築されたモダンな洋風建物です。

旧警察署

旧岡田家〔上下歴史文化資料館〕

翁座〔木造2階建ての本格的な劇場〕

翁座〔内部〕

上下商工会館（旧警察署庁舎）

こぼれ話

備後銀行

備後銀行は、明治32年（1899）に芦品郡府中町に本店をおいて開業した銀行で、府中を中心とした地域が内陸部における産業の中心地となっていた状況を背景に、府中商工業者の機関銀行として設立されました。

設立当初の役員には、府中町と上下町の資産家が名を連ねています。設立当初の資本金20万円、払込資本金5万円で、払込資本金5万円のうち半額は上下町側が負担していたとのことです。

昭和初期の金融恐慌や世界的な不況の影響を受け、昭和９年（1934）に藝備銀行（広島銀行の前身）に吸収合併され解散しましたが、それまでの約35年間、数々の合併話に加わらず単独営業を続け、府中の商工業者を支えた地方銀行でした。

旧芦品郡役所庁舎

明治政府は廃藩置県を断行し、翌明治５年（1872）には郡も廃止し、「大区･小区制」を実施しました。例えば、府中市村（現在の府中市府中町）は、小田県第４大区第８小区府中市村と表示されました。しかし、長い歴史を持った郡を無視した諸政策には非難が多かったので、わずか６年で大区・小区制を廃止して郡を復活させました。

郡には郡役所が置かれ、官選の郡長が任命されました。さらに、明治23年（1890）には「郡制」が制定され、新たに議決機関として郡会が設置されることになり、郡は自治体としての性格を持つようになりました。

この頃から全国で郡の整理統合が進められ、日常的に行き来が頻繁な芦田郡と品治郡のような近くて狭い郡同士は合併することになりました。明治31年（1898）に芦品郡が誕生し、新郡役所は、当時郡内で最も繁華な府中町の通りに面して建てられ、明治36年（1903）３月28日に移庁式が盛大に行われました。

移築前の様子（1976年頃撮影）

現在の様子（2012年撮影）

この建物は和洋風折衷のいわゆる擬洋風建物です。当時、役所・学校・駅などたくさんの人が集まる建物は擬洋風で建てられることが多く、芦品郡の人たちも洋風群役所を見て、新しい時代の雰囲気を感じたことでしょう。

ところで、政府は地方行政制度、とりわけ「郡」の位置づけに悩んでいました。郡には課税権が与えられず、郡行政は府県知事や政府の監督を受け、自治体というには不完全なものでした。結局、大正10年（1921）に郡制廃止、５年後には郡役所の機能も廃止されるに至りました。半世紀に満たない中で、郡役所は歴史的役割を終えたのです。

その後、旧芦品郡役所庁舎は県の出先機関などの事務所として利用されましたが、昭和51年（1976）、道路拡幅に伴い旧芦品郡役所建物は取り壊されることになりました。ちょうど、旧制府中中学（現府中高等学校）校舎の擬洋風建物が取り壊されたばかりで、街のシンボルのような建物が相次いでなくなってしまうことを残念に思う市民たちは、建物の保存運動を行いました。その結果、多くの市民の賛同を得て募金も集まり、土生町の造成地に移築され、歴史民俗資料館として再利用することになりました。

現在、明治時代に建てられた擬洋風の郡役所建物は極めて数が少なくなり、いくつかは国の重要文化財にも指定されています。時代を語る貴重な歴史遺産です。

天井を支える柱の骨組み

玄関車寄せの装飾

軒下四隅の飾り

福塩線の開通

福塩線は、山陽本線福山駅と芸備線塩町駅（三次市）を結ぶ鉄道路線（78km）です。

明治28年（1895）、府中市村の延藤吉兵衛ほか74名により「福山～府中間」が最初に計画されました。その後、明治43年（1910）に改めて鉄道計画が進められ、大正３年（1914）に、福山～府中間で両備軽便鉄道株式会社が営業を開始しました。昭和８年（1933）には国鉄に買収されて福塩南線となり、翌年に線路幅を762mm（軽便）から1067mm（省線）へ拡幅する工事に着手、昭和10年（1935）に現在の本庄廻り（福山市）のルートが完成し、府中駅も府中町永井町から現在地へ移転しました。

一方、府中～三次間については、大正４年（1915）に広島～三次間の芸備鉄道が開通したのを機に、鉄道を備後南部から三次へという運動が起きました。大正９年（1919）には上下町の有志が福山～三次間の鉄道敷設を沿線各町村へ呼びかけて、陳情運動を毎年繰り返しました。その努力の結果、昭和５年（1930）に上下～塩町間の福塩北線の着工が決まり、塩町～吉舎間が昭和６年（1931）に、吉舎～上下間が昭和10年（1935）に開通しました。

そして、昭和13年（1938）、府中～上下間の開通により、福塩線が全線開通しました。

鉄道の開通は、一気に人や物の流れを活性化させ、地域の近代化に大きく貢献しました。初めて鉄道が開通した時の記念式典は各市町村で盛大に行われ、いかに鉄道の開通が住民の念願であったがうかがえます。

その後、昭和50年（1975）頃までは、福塩線は賑わいをみせていました。しかし、車社会になるにつれ利用者は徐々に減少し、昭和59（1984）年には第３次赤字ローカル線の廃止対象路線となりました。そのため、昭和61年（1986）には沿線の市町村が中心となって福塩線対策協議会を結成し、「ふるさとに乗って残そう福塩線」をスローガンに推進運動を展開しています。昭和62年（1987）、国鉄の民営化でＪＲ西日本の営業となった今も、その運動は継続され、平成26年（2014）に福山―府中間開通100周年を迎えました。

開通当時の府中駅（大正時代）

現在地に移転した府中駅（昭和10年頃）

上下駅（昭和10年頃）

鉄道開通の余興見物（上下本町通）

工業都市府中の萌芽

現在の府中市はさまざまな業種が集積した内陸工業都市です。家具・繊維・金属・機械・プラスチック製品などの製造業を中心とした「ものづくりのまち」として発展してきました。福山城下郊外の手工業地域として、その萌芽はおおむね江戸時代末期から明治初頭に遡ることができます。

家具などの木工業

「府中家具」の名で全国に知られた家具工業については、江戸時代後期に大坂でタンス製造技術を修得した内田円三が、府中に帰郷した後に盛んになったといわれていますが、詳しいことはわかっていません。ただ明治中期以降に、タンスや桐箱などの指物類が地場産業として盛んになったのは間違いありません。タンスなどの指物、琴、下駄の製作には桐材が利用され、部材を順にとっていく、一種のコンビナートを形成していました。

木材加工の様子（昭和初期頃）

繊維産業

府中地方は、府中市村に福山藩の木綿運上（営業や売上にかかる税）所が設置されたように、綿作と加工が盛んでした。宝永８年（1711）の『備後郡村誌』によれば、芦田郡では、畑地の綿作率が70％の町村をはじめ、14か村で綿作が行われ、農閑期副業として「女ハ綿ヲ織」と記されています。明治中期から織物業者が、周辺農村の女性に織機を貸し出して賃織を行い、農家の副業として盛んになりました。女性を工員として雇用する業者も現われ、小規模織物製造業者が増えて、府中の工業の中核となりました。また芦品地方では、明治中期から蚕業指導が進められて生産量も増え、製糸業者が多くなりました。大正４年（1915）には機械製糸が始められ、製糸工場がさかんに設立されました。

備後絣の糸干し（昭和16年・広谷町）

染料の原料である藍は、江戸時代末期から芦品地方で栽培されていましたが、加工業者が増え、明治22年（1889）には府中に備後藍商同業組合が結成されるまでになりました。第一次世界大戦による好景気で、府中地方の染料産業は著しく発展したものの、織物業では染料が不足しました。

染料の需要地であったことを背景に、大正５年（1916）、帝国染料製造株式会社（現日本化薬㈱）が硫化染料の製造会社として府中市で創業するなど、硫化染料の製造会社が多く設立され、化学産業の基礎が築かれました。その後、廃液処理などの関係で、臨海地帯の福山に移行しました。

タバコ（煙草）製造

タバコ（煙草）は、江戸時代中期頃に自家用栽培が備後南部で広がり、文化年間（1804～18）には製造業者も現われるようになりました。文政年間（1818～30）に刻みタバコの分業制の新製法を始め、安政年間（1854～60）になると、刻み機械を使う製造業者も増えてきました。この頃、葉タバコの栽培が盛んで「備後煙草」と呼ばれていましたが、葉タバコは府中に集められ、刻みタバコに加工され、全国に売り出されるようになりました。明治前期には府中町・出口町で多くの製造所が設立されており、刻みタバコの生産は県内一と

専売局府中製造所（明治末・元町）

なっていました。明治37年（1904）時点では、府中町を中心に21の製造業者があがっています。明治38年（1905）には煙草専売制のもと、府中に「煙草製造所」（のちのＪＴ府中工場）が設置されました。

その後、嫌煙運動などの影響を受けて、平成16年（2004）に工場は閉鎖し、現在、跡地が「府中学園」になっています。

醸造業（酒造・味噌）

物資の集散地であった府中では、醤油や味噌、酒造りなどの醸造業も盛んでした。

府中味噌の起源はおよそ400年前といわれていますが、当時は家内工業的なものでした。明治時代に入り、味噌専門の製造工場が出来たようです。そして、第二次世界大戦後の昭和30年（1955）には12工場に増加し、広島県内の生産量の約4分の１を占めていました。

酒造業も盛んで、明治10年（1877）創業の桑田酒造の「天晴（あっぱれ）」ほか、橋本酒造の「洗心（せんしん）」、上安原酒造の「幾千代（いくちよ）」など、酒造会社が８社ありましたが、現在はすべて廃業しています。

味噌出荷作業（昭和初期頃）

金属工業

明治31年（1898）赤松鉄工所が創業、その後大正・昭和にかけて、大小鉄工関係工場が次々に生まれました。第二次世界大戦を経て戦後、急激に発展し、現在の金属工業の基盤を確立しました。

備後国府跡の発掘調査では、国府附属工房の系譜を受け継いだ、鋳物に関係した遺構・遺物が多く確認されます。また中世には、府中に国分寺助国（こくぶんじすけくに）という刀鍛治の一党がいたという説があります。近代の金属工業の素地だったと考えられるかもしれません。

このような産業が、現在の府中市の主要産業につながってきていますが、その発展の背景には、備後地方の交易上の主要結節点という地理上の利点が関係しているといえるでしょう。

現在、府中市では、このようなまちの歴史・特性を踏まえて「ものづくり産業」を活かしたまちづくりに総合的に取り組んでいます。

こぼれ話

剣先（けんざき）水車

出口川と芦田川が合流する所の中州「剣先」は、水車小屋が造られ、水車を利用した加工産業が盛んで、府中の一大工業地であったといいます。具体的には、酒米の精米、絞油、刻み煙草の製造などが行われていました。水車がいつ造られたのかははっきりしませんが、一説には寛永16年（1639）頃の芦田川改修の時ではないかと言われています。

大正時代には、水車の規模が大きくなり、その大水車が府中の名物ともなっていたようです。

また、昭和10年頃までは末広橋の下辺りに貸しボートがあって、夏には涼を求める人で賑わっていました。

昭和20年の枕崎台風で流れた後も、一部修復して数年稼働しましたが、電力に取って替わられ、昭和32年の芦田川改修で中州そのものが姿を消しました。

芦田川から剣先周辺を望む（昭和初期頃）

関連年表

※日本のできごと
府中市周辺のできごと

旧石器時代

約３万年前 ― この頃には日本列島に人々が暮らす
１万数千年前 ― この頃から気候が暖かくなり海面が上昇し、やがて現在のような日本列島になる
岩陰・洞窟遺跡が広がる（帝釈峡遺跡群）

縄文時代

約１万２千年前 ― 最古の土器が作られる
府中市でも縄文時代から人々が暮らす
２千数百年前 ― 朝鮮半島から稲作が伝わり、狩猟採集生活から農耕生活へ移行する

弥生時代

各地にくにが生まれる
57年 ― 倭の奴国王が後漢へ使者を送る
239年 ― 邪馬台国の女王卑弥呼が魏へ使者を送る
弥生時代の集落・墓地が府中市各所に営まれる

古墳時代

３世紀後半頃 ― 前方後円墳がつくられはじめる
４世紀中頃 ― 大和の勢力が強大となる
478年 ― 倭王武が宋に使者を送る
538（552）年 ― 百済から仏教が伝わる
古墳や集落が府中市各所に営まれる
代表的な古墳に山の神古墳群・南山古墳など

飛鳥時代

600年 ― 第１回の遣隋使が送られる
645年 ― 大化の改新が始まる
672年 ― 壬申の乱が起こる
記録に備後国が現れ、この頃国府が置かれる
伝吉田寺が建立される
701年 ― 大宝律令が定められる
葦田郡から甲奴郡が分立し、葦田郡に葦田郷・広谿郷、甲奴郡に矢野郷などが置かれる

奈良時代

710年 ― 平城京に遷都する
712年 ―「古事記」がまとめられる
記録に常城が現れる
前原遺跡が営まれる
741年 ― 諸国に国分寺建立の詔が出される
８世紀後半 ―「万葉集」ができる

平安時代

794 ― 平安京に遷都する
青目寺が創建される
894年 ― 遣唐使が廃止される
11世紀初め ―「枕草子」「源氏物語」ができる
1185年 ― 平家が滅びる

鎌倉時代

1192年 ― 源頼朝が鎌倉幕府を開く
1221年 ― 承久の乱が起こる
1274･1281年 ― 文永･弘安の役が起こる
1333年 ― 鎌倉幕府が滅びる

室町時代

有福庄・矢野庄などの荘園や国衙領が営まれる
1336年 ― 足利尊氏が室町幕府を開く
府中周辺でも南北朝の争いが起こる
1362年 ― 記録に「備後国符中」が現れる
1392年 ― 南北朝が統一される
1397年 ― 足利義満が金閣を建てる
1437年 ―「備後国府城」の戦いが起こる
1467年 ― 応仁・文明の乱が始まる（～1477年）
1543年 ― 鉄砲が伝来する
1549年 ― キリスト教が伝わる
1573年 ― 室町幕府が滅びる

安土桃山時代

1576年 ― 織田信長が安土城を築く
毛利氏が中国地方を支配する
1590年 ― 豊臣秀吉が全国を統一する
1592年 ― 文禄・慶長の役が始まる（～1598年）
1600年 ― 関ヶ原の戦いが起こる
福島氏が広島藩主となり安芸・備後を治める

江戸時代

1603年 ― 徳川家康が江戸幕府を開く
水野氏が福山藩主となる
1639年 ― 鎖国が完成する
1700年 ― 上下に代官所が置かれる
備後は福山藩・広島藩・中津藩・幕府領に
1716年 ― 享保の改革が始まる
1853年 ― ペリーが浦賀に来航し、翌年開国する
1867年 ― 大政奉還　江戸幕府が滅びる

明治・大正時代

1872年 ― 新橋横浜間に鉄道が開通する
1876年 ― 現在の広島県域が確定する
1889年 ― 大日本帝国憲法が発布される
1894年 ― 日清戦争が始まる（～1895年）
1903年 ― 府中町に芦品郡役所が建てられる
1904年 ― 日露戦争が始まる（～1905年）
1910年 ― 韓国を併合する
1914年 ― 第一次世界大戦が始まる（～1918年）
1925年 ― 普通選挙制度・治安維持法が成立する

昭和・平成時代

1931年 ― 満州事変が起こる
1938年 ― 福塩線が全通する
1939年 ― 第二次世界大戦が始まる（～1945年）
1941年 ― 太平洋戦争が始まる
1945年 ― 広島･長崎に原子爆弾が投下され、無条件降伏をする
1947年 ― 日本国憲法が施行される
1951年 ― サンフランシスコ講和条約が結ばれる
1954年 ― 合併により府中市・新上下町が誕生する
1964年 ― 東京オリンピックが開催される
1972年 ― 中国との国交が回復する
2004年 ― 新府中市が誕生する

府中市の指定文化財

府中市の指定・登録文化財一覧

国指定文化財　1件

番号	種別	名　称	所在地	所有者	指定年月日
①	天然	久井・矢野の岩海	上下町矢野1722-61,1722-62の一部,1722-71の一部,1749-1の一部,1749-2	個人（管理団体府中市）	昭和39年6月27日

※その他、地域を定めず指定されている天然記念物のうち、特別天然記念物オオサンショウウオの生息が府中市で確認されている。

国登録文化財　8件

番号	種別	名　称	所在地	所有者	指定年月日
②	有文	延藤家住宅洋館	出口町37-1	個人	平成12年10月18日
	有文	延藤家住宅和館（洞仙荘）			
③	有文	恋しき主屋	府中町564-1	法人	平成16年11月8日
	有文	恋しき離れ（桔梗の間）	府中町177		
	有文	恋しき離れ（菊の間）	府中町178		
	有文	恋しき離れ（桐・さつきの間）	府中町178,179-2		
	有文	恋しき離れ（竹・萩の間）	府中町179-5		
④	有文	上下町商工会館（旧上下警察署庁舎）	上下町上下883	法人	平成23年7月25日

広島県指定文化財　26 件

番号	種別	名　称	所在地	所有者	指定年月日
⑤	重文	金銅仏具（22点）五種鈴（独鈷鈴・三鈷鈴・五鈷鈴・宝塔鈴・宝珠鈴）5口,輪宝1口,輪宝台1口,羯磨4口,羯磨台4口,六器6口,火舎1口	元町344	栄明寺	昭和28年8月11日
⑥	重文	版本大般若経（600巻）（付経櫃3櫃）	栗柄町2987	神宮寺	昭和29年11月11日
⑦	重文	青目寺塔婆（1基 五層石塔婆）	本山町1200	青目寺	昭和30年3月30日
⑧	重文	木造日光菩薩立像（1躯）	本山町1201	青目寺	昭和30年3月30日
⑨	重文	木造月光菩薩立像（1躯）	本山町1201	青目寺	昭和30年3月30日
⑩	重文	日吉神社宝塔（1基「正和四年五月八日」銘）	本山町85	日吉神社	昭和32年2月5日
⑪	重文	木造聖観音立像（1躯）	本山町1201	青目寺	昭和40年4月30日
⑫	重文	木造天部立像（2躯　伝持国天・伝多聞天）	本山町1201	青目寺	昭和40年4月30日
⑬	重文	絹本著色釈迦十六善神像（1幅）	栗柄町2987	神宮寺	平成6年10月31日
⑭	重文	五輪塔形曳覆曼荼羅版木（1面）	本山町1201	青目寺	平成7年1月23日
⑮	重文	木造阿弥陀如来坐像（1躯）	元町344	栄明寺	平成7年9月21日
⑯	重文	石造宝篋印塔（1基「正平十」銘）※正平十年=1355年	上下町矢野768-1	安福寺	昭和38年4月27日
⑰	重文	木造薬師如来坐像	上下町上下443	吉井寺	昭和54年3月26日
⑱	有民	階見の若宮信仰資料 62点,若宮神像48躯,合祀若宮木札11枚,石造若宮霊璽1基,祖霊社棟札2枚,附祖霊社1棟	上下町階見2695	八幡神社	平成7年1月23日
⑲	無民	備後府中荒神神楽	府中市鵜飼町福山市新市町	備後府中荒神神楽保存会	昭和52年9月14日
⑳	無民	弓神楽	上下町井永	井永弓神楽保存会	昭和46年12月23日 昭和53年1月31日（国選択）
㉑	無民	矢野の神儀	上下町矢野	矢野神儀保存会	昭和51年6月29日
㉒	史跡	青目寺跡	本山町222-1の一部,273	本山生産森林組合	昭和15年2月23日
㉓	史跡	伝吉田寺跡	元町619-1・4～10	金龍寺ほか	昭和18年3月26日
㉔	史跡	天領上下代官所跡	上下町上下466-1・2・3	府中市ほか	昭和16年3月10日
㉕	史跡	有福城跡	上下町有福11-1,12-1の一部,15の一部,25の一部,18,20,28,29	個人	昭和16年3月10日
㉖	史跡	南山古墳	上下町水永122-1,125-2,125-5の一部	個人	平成元年3月20日
㉗	天然	行縢八幡神社の大木群17株,イチョウ1株,ツガ2株,カヤ3株,スギ1株,アラカシ3株,エノキ1株,カゴノキ1株,クスノキ2株,フジキ1株,ノダフジ1株,ムクロジ1株	行縢町773	行縢八幡神社	平成3年12月12日
㉘	天然	井永のシラカシ	上下町井永691	八幡神社	昭和60年12月2日
㉙	天然	矢野のケンポナシ	上下町矢野1045	福泉寺	昭和60年12月2日
㉚	天然	国留のヤブツバキ	上下町国留515-3	個人	平成7年9月21日

※広島県指定文化財の正式名称：重文…広島県重要文化財　有民…広島県有形民俗文化財
無民…広島県無形民俗文化財　史跡…広島県史跡　天然…広島県天然記念物

府中市指定文化財　54 件

番号	種別	名　称	所在地	所有者	指定年月日
㉛	重文	大久保弥生式遺跡出土品	元町1-5	府中市教育委員会	昭和39年11月5日
㉜	重文	宇瓦（備後国府跡［推定］出土）	出口町898	広島県立府中高等学校	昭和39年11月5日
㉝	重文	木造僧形坐像（伝青目上人像）	本山町1201	青目寺	昭和39年11月5日
㉞	重文	石造五輪塔（伝うしの塔）	本山町109	青目寺	昭和39年11月5日
㉟	重文	日吉神社府川石鳥居	府川町64	日吉神社	昭和39年11月5日
㊱	重文	木造阿弥陀如来坐像	栗柄町1950	西龍寺	昭和42年2月10日
㊲	重文	伝吉田寺跡出土品	元町622	金龍寺	昭和42年2月10日
㊳	重文	洞仙焼御神酒徳利	出口町745	甘南備神社	昭和44年10月14日
㊴	重文	青目寺石造水鉢	本山町1201	青目寺	昭和49年9月9日
㊵	重文	坊迫宝塔	元町715-2	元町財産区	昭和49年9月9日
㊶	重文	常福寺石造水鉢	鵜飼町201	常福寺	昭和49年9月9日
㊷	重文	旧芦品郡役所庁舎	土生町882-2	府中市	昭和52年12月6日
㊸	重文	銅鐘	元町344	栄明寺	昭和54年12月25日
㊹	重文	木造薬師如来坐像	元町344	栄明寺	昭和54年12月25日
㊺	重文	紺紙金泥大般若波羅蜜多経（巻第五百七十）	元町344	栄明寺	昭和54年12月25日
㊻	重文	南宮神社本殿	栗柄町2980	南宮神社	昭和58年12月6日
㊼	重文	府中八幡神社末社天満宮本殿	出口町162	府中八幡神社	平成12年2月14日
㊽	重文	南宮神社鐘撞堂・随身門	栗柄町2980	南宮神社	平成19年12月25日
㊾	重文	日吉神社本殿	本山町761	日吉神社	平成19年12月25日
㊿	重文	金毘羅神社石燈籠	府中町562	金毘羅神社	平成22年6月25日
51	重文	善昌寺座禅堂	上下町上下341	善昌寺	昭和40年9月10日
52	重文	善昌寺鶯張り廊下	上下町上下341	善昌寺	昭和40年9月10日
53	重文	安福寺の宝塔	上下町矢野766	安福寺	昭和56年2月17日
54	重文	長福寺の無縫塔	上下町小堀1235-2	長福寺	昭和56年2月17日
55	重文	国留八幡神社棟札	上下町国留200	八幡神社	昭和56年2月17日
56	重文	井永八幡神社大般若波羅蜜多経（巻第二百八十七）	上下町井永691	八幡神社	平成15年2月18日
57	重文	水永大歳神社大般若波羅蜜多経（巻第三百九）	上下町水永481	大歳神社	平成15年2月18日
58	重文	元禄検地水帳 14冊		府中市　個人	平成15年2月18日
59	有民	大歳神社大数珠	上下町水永481	大歳神社	平成15年2月18日
60	無民	上下神楽	上下町上下1498	上下神楽保存会	昭和49年12月13日
61	無民	井永八幡神社祭礼行事	上下町井永260	井永神儀保存会	昭和51年12月17日
62	無民	井永神楽	上下町井永538	井永神楽保存会	昭和54年4月20日
63	史跡	五弓雪窓の墓	本山町1672-2	個人	昭和49年9月9日
64	史跡	大戸直純の墓	出口町45	個人	昭和49年9月9日
65	史跡	幡立山城跡	本山町25-1,185,出口町84-2	本山生産森林組合照林寺,元町生産森林組合	昭和49年9月9日
66	史跡	金龍寺東遺跡	元町617-3,617-7・9,603	府中市・府中市土地開発公社	平成8年5月31日
67	史跡	孝子畠	上下町小堀2032-3	小堀二森町内会	昭和54年12月11日
68	史跡	義農仁兵衛と庄三郎の墓塔	上下町矢野1644-3	安福寺	昭和56年2月17日
69	史跡	翁山城址（護国山城址）	上下町上下80-1	府中市	平成8年9月20日
70	天然	諸毛八幡神社の大スギ	諸毛町2295	諸毛八幡神社	昭和42年2月10日
71	天然	諸毛艮神社のアカガシ	諸毛町2292	諸毛艮神社	昭和54年12月25日
72	天然	矢野八幡神社のスギ	上下町矢野1236	八幡神社	昭和58年7月12日
73	天然	階見八幡神社のケヤキ	上下町階見2695	八幡神社	昭和58年7月12日
74	天然	深江のシダレザクラ	上下町深江669-3	個人	昭和62年7月24日
75	天然	井永のエノキ	上下町井永157-1	個人	昭和62年7月24日
76	天然	井永のヒガンザクラ	上下町井永186	府中市	昭和62年7月24日
77	天然	善昌寺のビャクシン	上下町上下341	善昌寺	昭和62年7月24日
78	天然	清芳園のビャクシン	上下町676-3	府中市	昭和62年7月24日
79	天然	河井のナラガシワ	上下町小堀1285-2	個人	昭和62年7月24日
80	天然	河井の石灰岩地植生	上下町小堀1011-2,1113-1,1114-2,1124,1136-1,1138-4,1258-6,1135-1	個人	平成元年12月20日
81	天然	養源寺のタラヨウ	上下町階見2795	養源寺	平成2年6月13日
82	天然	宇根のトチノキ	上下町矢野955-1	個人	平成4年9月22日
83	天然	合祀神社のシンジュ	上下町上下668-1	合祀神社	平成8年9月20日
84	天然	矢野（宇根）の火道角礫岩の露頭	上下町矢野986-1	個人	平成8年9月20日

※府中市指定文化財の正式名称：重文…府中市指定重要有形文化財
有民…府中市指定有形民俗文化財　無民…府中市指定無形民俗文化財
史跡…府中市指定史跡　天然…府中市指定天然記念物

府中市の指定文化財

国の天然記念物

❶久井・矢野の岩海［国指定］

崩壊した花崗岩が急斜面を転落し、谷に累積して形成されたもの。長径2～6mの風化して角がとれて丸くなった礫が重なり合い、厚さ７m以上で谷の方向に約100m続いている。巨礫が支え合って、人が入れるほどの隙間ができており「コウモリ岩」と呼ばれていた。

底部基盤岩の表面を地下水が流れ、洞口からは夏も冷気が噴き出している。

府中市指定文化財

㉞矢野（宇根）の火道角礫岩の露頭［市指定］

新生代新第3紀後期（約800万年前）に、地中から噴出したマグマの通り道（火道）が、固まってできた露頭である。岩石の大部分は玄武岩で、ほかにも基盤岩の砂岩・泥岩・花崗岩を取り込んだものも見られる。全体的にはもろくて崩壊しやすい状態である。

国の登録有形文化財

❷延藤家住宅洋館・和館（洞仙荘）［国登録］

昭和6年（1931）、南面する傾斜地に別荘施設として建築された。木造2階建。和館部とその玄関脇に建つ応接用の施設である洋館部からなる。

和館部は2階建ての主体部と渡り廊下で接続された離れからなり、洋館部は１階を擬石塗り、2階をハーフティンバーとし、南面にベイウィンドウを設け、西面では1階に出窓を造り、その上を2階バルコニーとしている。

❹上下町商工会館(旧上下警察署庁舎)［国登録］

昭和5年（1930）、上下警察署庁舎として建築された。桁行13m、梁間7.4mの木造2階建、寄棟造鉄板葺の洋風建物。

正面中央に張り出した玄関ポーチの上部を塔屋状に立ち上げ、外壁に2連または3連の縦長窓を左右対称に配置し、鉄筋コンクリート造りのような外観を表現している。

府中市指定文化財

㊷旧芦品郡役所庁舎［市指定］

明治36年（1903）頃に竣工した旧芦品郡役所庁舎。府中町一番地に建っていた。昭和51年（1976）に、市民運動により保存移築された。現歴史民俗資料館。

登録文化財制度が出来る以前に市の指定文化財となっていた近代遺産。

詳しくは25ページ。

❸恋しき主屋・離れ４棟［国登録］

恋しきは、江戸時代に石州街道の宿場町として発展した地区にあり、明治５年に開業した老舗旅館であった。主屋・庭園・離れからなり、明治・大正・昭和を通じ、当時の好みを取り入れた増改築がなされ、幾つもの時代が重層しているところにこの建物固有の価値がある。

主屋は一部3階建て、変化に富んだ外観を構成し、町並み景観上際だっている。そして、庭園を囲むように茶室を設けた4棟の離れが点在しており、風雅な外観を見せている。離れは全て平屋建てで、桔梗の間、菊の間は野趣に富んだ数奇屋風、桐・さつきの間は堂々とした構成をもち、竹・萩の間は、数奇屋風の軽快で風雅なつくりである。

主屋：明治初年，
　　明治末・大正・昭和初期頃増築
離れ(桔梗の間)：大正初期
離れ(菊の間)：大正初期
離れ(桐・さつきの間)：大正期
離れ(竹・萩の間)：昭和22～23年頃

近代遺産と登録有形文化財

登録有形文化財表示プレート

登録有形文化財とは、平成8年（1996）に創設された文化財登録制度に基づき、国の文化財登録原簿に登録された有形文化財のことである。急激な都市化によって、主に明治時代以降の近代建造物が失われていくことに歯止めをかけるために創設された。文化財を「自由に活用しながら保存する」ための制度で、外観を大きく変えなければ改修や改装も認められている。

登録対象となる建造物は、建築後50年以上がたち、歴史的景観や造形に優れ、再現が容易でないものなどの選考基準を満たすもので、国や地方公共団体の指定を受けていないものに限られる。

平成17年（2005）には、登録制度が美術工芸品にも拡充され、さらに、登録有形民俗文化財、登録記念物制度も創設された。

府中市では、建造物のみの上記8件が登録されている。

府中市の指定文化財

有形文化財

青目寺・日吉神社の文化財

青目寺は、もともとは市街地北方の亀ヶ岳周辺に存在した寺院で、寺伝によると、延喜年間(901～923)には、山頂に4坊、周辺の山腹に11寺を従えるほど隆盛していたが、たび重なる火災などによって次第に衰退し、寛保3年(1743)に現在地に焼失をまぬがれた仏像を移したと伝わっている。

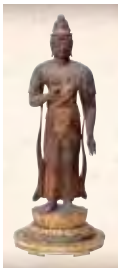
一方、日吉神社は、青目寺の守護神として近江から勧請されたといわれている。

市内の指定を受けた有形文化財のうち、約3割が、青目寺と日吉神社に関係したものである。

⑧木造日光菩薩立像［県指定］
⑨木造月光菩薩立像［県指定］

一木造りで像高88㎝、平安時代初期の作である。本像は木地に布を貼り、その上に漆を塗った乾漆像であるため、衣文の彫りがやや浅く見える。今は剥落しているが、金箔を施してあったと伝えられる。

⑪木造聖観音立像［県指定］



一木造りで背刳りが施されている。像高117㎝、平安時代初期の作であるが、両腕は後補されている。本像は青目寺が山上に栄えていた頃の、いずれかの御堂の本尊であったと考えられる。

㉝木造僧形坐像(伝青目寺上人像)［市指定］

青目寺本堂内に安置されている僧形像。寺伝により、開祖青目上人の像といわれている。像高79㎝、膝張56㎝の一木造りの座像で、写実的手法により、素朴な表情をよく現し、のびのびした作風が室町時代の特色を表している。

⑦青目寺塔婆(五層石塔婆)［県指定］

青目寺本堂右の収蔵庫北に所在。現高2.08mの花崗岩製。

基礎の正面に「正応五(1292)年二月二十八日、願主源□」の銘文が陰刻してあり、初重軸部(塔身)には、四面に胎蔵界四仏の種子を薬研彫りで刻んでいる。各笠とも軒は厚く、真反りに造られており、鎌倉期の特色をよく現している。

㉞石造五輪塔(伝うしの塔)［市指定］

青目寺西方の山中に所在。総高1.4m、花崗岩製で大形のものである。火輪(笠)の勾配がゆるく、軒は厚く真反りに造られ、水輪が太鼓状の形態をするなど、古式を示しており、鎌倉時代前期頃のものと推定され、県内では最古の部類に入ると思われる。

⑩日吉神社宝塔(「正和四年五月八日」銘)［県指定］

日吉神社本殿の右後方の基壇上に所在。高さ約1.5mの花崗岩製。

基礎の一面に「正和四年(1315)五月八日、勧進沙門、玄真」の刻名があるが、現在はほとんど判読できない。塔身の首部上面に、深さ12.5㎝のくり込みがあり、この中に納経してあったものと思われる。基礎の下には備前焼の甕が埋められていた。

㉟日吉神社府川石鳥居［市指定］

府川町に所在する日吉神社の鳥居。現高3.73m、花崗岩製。

元文年間(1736～41)頃に暴風雨で倒壊した後、宝暦10年(1760)に旧材の一部を再利用して再建したもの。島木の中央と右端の材と貫の両端の材が創建当初の材と推定される。転びがなく柱が垂直に立つことや島木が直線的なことなど古い様相が見られる。鎌倉時代末期から室町時代前期頃の創建と考えられる。

⑫木造天部立像［県指定］

一木造りで像高117㎝(伝持国天)、118㎝(伝多聞天)でともに平安時代初期の作である。持国天、増長天、広目天、多聞天の四天王の内2躯で、持国天、多聞天との伝承はあるが、両腕が後補されているため確定はできない。

⑭五輪塔形曳覆曼荼羅版木［県指定］

曳覆曼荼羅とは棺に納められた遺体を覆う白布に曼荼羅を描いたもので、それを印刷するための版木が青目寺に伝わっている。

寺伝によると「正元元年(1259)四月二十八日」の年号が刻まれていたようである。いまは判読できないが、図像などから鎌倉時代製作と考えられる。

室町時代以前の版木は全国で5例しか確認されておらず、全国でも最古級のものと推測される。

㊴青目寺石造水鉢［市指定］

青目寺境内所在。現高95cmの花崗岩製。

鉢は八角形で側面に蓮華文を刻み出し、竿の高さは60㎝で下半分の角を削いである。正面は「□為□二世也」、左側は「天文二四(1555)乙卯八月日」と判読できる。

常福寺(41)同様、備後地方特有の形式をもつ水鉢である。

㊾日吉神社本殿［市指定］

三間社の入母屋造りである。正面三間に内開きの部戸、側面前方一間に方引板戸を設け、四面に縁を廻らす。彩色はされてなかった可能性が高い。

寛永10年(1633)及び元禄16年(1703)に社殿再建の棟札があるが、様式的に元禄より少し新しい享保年間(18世紀前半)建立のものと考えられる。平成4年(1992)の解体移築では、全ての部材をそのまま使用し、当初の材がすべて残っている。

府中市の指定文化財

有形文化財

南宮神社

国府に関わりが深い神社で12～13世紀頃の神像も多く残されている。古代より永く崇敬され、江戸時代には福山藩の支援を受けて本殿が再建された。

神宮寺と合わせて、多くの文化財を今に伝えている。

⑥版本大般若経（600巻）（付経櫃3櫃）［県指定］

興福寺において刊行された、春日版とよばれる大般若経600巻のひとつである。この版本大般若経は、応永25～29（1418～22）年にかけて、僧中高の発願により、南宮神社へ奉納されたことが櫃の蓋に記されている。600巻全部が保存され、原則どおり200巻ずつ3櫃に納められ、櫃が経巻と同時代のものであるのは、極めて少なく貴重なものである。

⑬絹本著色釈迦十六善神像［県指定］

釈迦十六善神像は「大般若経」を転読する大般若会の時の本尊として懸用されたものである。縦210.0cm、横81.5cmを測り、画像の特徴から、宋元風の影響が強く、南北朝時代末期から室町時代初期の作と考えられる。セットになる大般若経600巻が現存しており、全国的にも稀少な例である。

㊻南宮神社本殿［市指定］

本殿は五間社の入母屋造りで、県内でも例が少ない。桁行三間、梁間一間の身舎の四周に庇を設けた三間四面庇の平面形式の発展型と考えられ、妻戸や連子窓を設ける形式は、新市町の吉備津神社本殿（国重要文化財）と共通する。両社とも入母屋造に千鳥破風と唐破風を設けている点が注目される。建築様式から、17世紀中頃のものと考えられる。保存状態は非常に良く、一部が後補材となる以外はよく残っている。

㊽南宮神社鐘撞堂・随身門［市指定］

鐘撞堂は、方一間の切妻造り、本瓦葺。本殿とほぼ同時期、17世紀中頃の建立と考えられる。鐘撞堂は、神仏習合時代には多くの神社にあったが、明治の神仏分離令により破却されたため、神社境内にあるものは極めて少なく、歴史的価値が高い。方一間の四方吹放ちの形式として、比較的古い建物であることも重要である。

随身門は、瓦葺で三間一戸の八脚門。貞享4年（1687）に建立されたという記述が残っており、建物の様式からみても、その頃の建立と考えられる。また、神像が2組残っており、以前は随身門が2か所あったと思われる。

⑤金銅仏具（22点）［県指定］

五種鈴（独鈷鈴・三鈷鈴・五鈷鈴・宝塔鈴・宝珠鈴）は和様のもので、鈴の頂部に八葉蓮弁の座を作り、胴に二段の帯をめぐらしてある。他に輪宝1、輪宝台1、羯磨4、羯磨台4、火舎1、六器6がある。

室町時代製作の古い密教仏具が、栄明寺に一括具備して保存されており、大変貴重である。

㊱木造阿弥陀如来坐像［市指定］

栗柄町安江の観音堂に所在。像高86cm、ヒノキ材の寄木造り。豊満で温和な表情や堂々たる風格を漂わせる姿が定朝様を彷彿とさせる。平安時代後期の製作と推定される。

かつてこの地に所在した「安衛寺」の本尊だったと伝えられる。

⑮木造阿弥陀如来坐像［県指定］

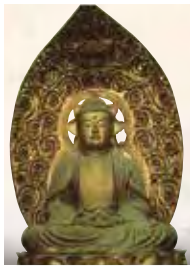
像高71.7cm。割矧造りで、頭・体とも前後に2材を合わせ、漆塗した上に金泥を塗っている。螺髪は切付螺髪である。像の各部が彫刻的均合を保ち、勇健な表現となっている。

全国的に見ても鎌倉時代前半期を代表する傑作である。栄明寺所蔵。

㊺紺紙金泥大般若波羅蜜多経（巻第五百七十）［市指定］

大般若波羅蜜多経600巻のうち、第570巻の写経である。紙巾25cm、全長832cmの紺紙で巻子本に作られている。書は金泥（金粉とニカワを混合したもの）により、藤原期のやわらかみのある和様の筆写体で書かれており、見返しには、釈迦説法の場面が描いてある。

㊹木造薬師如来坐像［市指定］



栄明寺の本尊としてまつられている。像高48cm、膝張38cmの寄木造りである。身体法衣に漆塗りをし、その上へ金箔をはってあったが、現在はほとんど剥落している。保存もよく、南北朝期の様式をよく表している。

㊸銅鐘［市指定］

高さ134cm、口径74cmの青銅製の梵鐘。

元禄4年（1691）、栄明寺第十九代翁阿上人の発願により、御調郡海裏邑（現在の世羅町宇津戸）の鋳物師丹下甚兵衛実次が造ったと銘文にある。現存する丹下氏作の梵鐘としては、甲山今高野山の寛文7年（1667）銘のものに次いで古いものと思われる。栄明寺の鐘楼にある。

府中市の指定文化財

有形文化財

⑰木造薬師如来坐像［県指定］

木彫寄木造り、像高1.49m、鎌倉時代後期（13世紀）作の半丈六仏である。彩色は江戸時代のものと思われる。

上下代官所の初代代官曲淵市郎右衛門が病気平癒の霊験に浴し、北方約1kmの吉井谷から吉井寺に移祭したと伝えられている。

⑭長福寺の無縫塔［市指定］

長福寺墓地にある歴代住職の無縫塔（塔身が卵形の墓塔）のうちの1基。結晶質石灰岩（小米石）製で、高さ90cm、基礎正面に、「当山中興開山遅用和尚天正八年庚辰（1580）林鐘」とある。

⑥井永八幡神社大般若波羅蜜多経（巻第二百八十七）［市指定］

大般若波羅蜜多経600巻のうち、第287巻の写経。全長8.85m、紺紙に金泥で書かれ、見返しには釈迦説法図が描かれている。

⑤善昌寺座禅堂［市指定］
⑫善昌寺鶯張り廊下［市指定］

座禅堂は一間四面の方形堂で、正中年間（1324～26）建立と伝えられる。背面頭貫木鼻や外回りの円柱に創建時と思われる部材が残っている。県内でも数少ない禅宗仏堂として貴重である。

鶯張り廊下は、独特の技法により本堂廊下を歩くと音が出るようになっている。永禄4年（1561）京都から高橋家次を招聘して本堂を再建したと伝わる。

⑯石造宝篋印塔（「正平十」銘）［県指定］
⑬安福寺の宝塔［市指定］

宝篋印塔は、高さ1.3mの花崗岩製。塔身には、金剛界四仏の種子が、基礎の裏面には「正平十年（1355）」の南朝年号が刻まれている。県内でも数少ない南北朝期の石造物である。

宝塔は、高さ2.35mの花崗岩製。刻銘なく造立年代は不明。

⑩坊迫宝塔［市指定］

元町の丘陵上に所在。高さ1.34m、花崗岩製。勾欄造りで、塔身軸部には縁板状の造出しが施されている。笠石の勾配はややゆるく軒反りは少ない。相輪は折損した残部が立てられている。

南北朝時代頃の製作と推測される。

⑦水永大歳神社大般若波羅蜜多経（巻第三百九）［市指定］

第309巻の写経。もとは井永八幡神社所蔵であったが、嘉永7年（1854）、大歳神社に八幡神を分祀した際、写経も分けたと伝わる。

④府中八幡神社末社天満宮本殿［市指定］

府中八幡神社は八尾山城の守護神であったと伝えられるが荒廃したため、地元住民が現在地へ社殿を再興した。当時21年をかけて募金を集め、元禄5年（1692）年に建立した本殿が、天満宮に転用されて現存している。この地方によく見られる本殿形式で、最古級のものである。建立当時の部材がよく残っている。

④常福寺石造水鉢［市指定］

常福寺本堂前にある。高さ91cmの花崗岩製。鉢は八角形で、側面に蓮華文を刻み出してある。竿の高さ63cmで、角の中ほどを深く削いである。正面に「奉寄進手水所一器□□□」「檀那□万歳栄盛當者也」、左側面に「□□不退□者也」、その左下に「五□左衛」、二行目に「天文十一（1542）壬寅年十一月吉日」の刻銘がある。背面には「尾道住大工左衛門」と刻まれ、尾道石工の作製が確認できる県内最古例である。

⑤金毘羅神社石燈籠［市指定］

金毘羅神社境内にある19世紀の石造の燈籠。現高8.38m（約3丈）、笠石は一辺2.62mで約4畳半の広さがある。

文化7年（1810）、讃岐の金毘羅宮を遥拝するため三浦堪右衛門が発起したとされる。天保5年（1834）に着工、天保12年（1841）に完成した。建立に関係する古文書や石碑も残っており、当時の府中の総力を挙げて完成した大事業であったことを現在に伝えている。

⑧元禄検地水帳 14冊［市指定］

元禄12年（1699）岡山藩により実施された検地台帳。上下村3冊、矢多田村1冊、水永村1冊、岡屋村1冊、二森村1冊、小堀村3冊、小塚村1冊、有福村3冊がある。

⑤国留八幡神社棟札［市指定］

国留八幡神社には24枚の棟札が保存されているが、明応5年（1496）と、天文16年（1547）の本殿再建棟札が指定されている。

府中市の指定文化財

有形文化財

㉛大久保弥生式遺跡出土品［市指定］

芦田川南岸の茶臼山山麓（栗柄町）に位置する大久保遺跡の出土品。昭和53年（1978）の発掘調査で弥生時代から古墳時代初期の住居跡や包含層が検出された。出土品には、壺・鉢・高杯・甑形土器などや鉄鎌・玉類がある。

㉜宇瓦（備後国府跡[推定]出土）［市指定］

旧広谷小学校（鵜飼町）南の水田で発見された均整唐草文軒平瓦。

㊲伝吉田寺跡出土品［市指定］

昭和17年(1942)の発掘調査で出土した、男性の顔をヘラ描きした丸瓦や藤原宮式の軒丸瓦など。

㊳洞仙焼御神酒徳利［市指定］

高さ42㎝、胴廻り21㎝の洞仙焼の徳利で甘南備神社に奉納されたもの。徳利の前面に「奉納」、後面に「天保六（1835）未四月、宮内屋新五郎、土生屋新右衛門、九州肥後宇土郡菊助」の銘がある。

この徳利により、1835年にはすでに洞仙窯が開窯されていたこと、また当時の陶工の名も知ることができる。

民俗文化財

▼ 有形民俗文化財

⑱階見の若宮信仰資料［県指定］

甲奴郡地方の若宮信仰は，亡くなった人の霊を氏神とともに祀る祖霊の信仰である。高さ18～30㎝の神職姿の立像・座像の若宮神像48体（享保18年（1733）から文政9年（1826）頃の間に制作）、石造若宮霊璽１基、家ごとの若宮木札11枚、祖霊社再建棟札２枚が、それらをおさめる祖霊社社殿を含めて一括指定されている。

㊾大歳神社大数珠［市指定］

安政４年（1857）再調の大数珠は288個の珠があり、全長12.12mである。雨乞いに用いられ、水永の全戸が集合して大数珠を繰りながら念仏を唱えていた。

▼ 無形民俗文化財

⑲備後府中荒神神楽［県指定］

この荒神神楽は、府中市近在の社家に伝承されてきたものを、明治初年に若連中が神楽人として伝授し、現在に至ったもので、７年目毎の年番神楽として一応の体裁を備えている。中心をなす演目は、荒神社の式年神楽において行なわれるもので、多くは一種の秘伝として取り扱われている。その曲目は、手草舞、剣舞、折敷舞、悪魔祓、造花、龍神舞、布乃舞、焼石神事の９曲である。

⑳弓神楽［県指定・国選択］

弓神楽は、弓祈祷、神弓祭、内神楽ともよばれ、かつては広島県東部の備後一円に行われていた。地域共同の荒神祭、私的な宅神祭に演奏される。神座の前に揺輪を据え、弓を結びつけ、銅拍子・笛の合奏で弦を打ち鳴らしながら、祭文をとなえ土公神を祭り、五穀豊饒と家内安全を祈る神楽である。

㉑矢野の神儀［県指定］

矢野一円の住人は洩れなくこの神儀に参加する。大太鼓・小太鼓・笛・鉦・ほら貝の音にのせて、唐うちわ・毛槍・羽熊などうちたて、屋形を担ぎ、須佐神社（祇園社、三次市甲奴町小童）に繰り出し、奉納する。行列の神儀練りと庭打ちは、勇壮にして華やかである。毎年7月第3日曜日に行われている。

㊵上下神楽［市指定］

備後神楽の伝統を保持し、その基本である儀式舞（神事式という）・能舞・五行祭を完全に演奏できる。

㊶井永八幡神社祭礼行事［市指定］

11月３日の例大祭の前夜、３組の神儀組による神殿入りがある。竿頭提灯を連ね、太鼓・銅拍子・笛で道中楽を奏し、宮入り、庭打ちをする。３日には神儀が奉納され、屋台・花鉾が行列に加わり宮入りをする。

㊷井永神楽［市指定］

備後神楽を継承するもので、９月14日の豊饒祭（放生会）と、例大祭年２回に奉納する。

府中市の指定文化財

史跡

㉒青目寺跡［県史跡］

亀ヶ岳山頂周辺にあった山上伽藍跡。寺伝によると、延喜年間（901～923）には、山頂に４坊、周辺山腹に11寺を従えるほど隆盛していたが、度重なる火災などによって次第に衰退し、現在地（青目寺）に焼失をまぬがれた仏像を移したと伝わっている。

平成７年（1995）以降、継続的に調査を進め、中御堂、西御堂、北御堂、東御堂、南御堂などの建物遺構を確認している。

㉓伝吉田寺跡［県史跡］

市街地北縁、金龍寺（元町）の南面に位置する。

飛鳥時代から平安時代の寺院跡である。1967年の発掘調査で乱石積の塔基壇と講堂基壇の一部が検出されている。

遺跡現地にある金龍寺には塔の心礎といわれる石が伝存している。

㉔天領上下代官所跡［県指定］

旧上下町役場跡に位置する。元禄１１年（1698）の水野家断絶後の検地によって、旧福山藩領は15万石とされ、5万石分が幕府領へ編入され、上下に代官所が置かれた。享保２年（1717）、幕府領のうち二万石分が豊前中津藩領となり、上下代官所は石見大森代官所の出張陣屋と改められて、幕末まで存続した。

㉕有福城跡［県指定］

本丸は約50m×20mの規模である。四方へ延びる丘陵尾根には大小の郭、斜面には堅堀などを構える。建武３年（1336）、竹内兼幸は南朝方として有福城に立てこもったが、北朝方の山内氏・長谷部氏などの攻撃を受け敗れた。また、天正９年（1581）に有福元貞が毛利輝元から「有福要害」の普請と番衆の入城を命じられたことが確認される。

㉖南山古墳［県指定］

横穴式石室を内部主体とする前方後円墳。全長は22.5mで、後円部は直径約14.5m、高さ約4m、後円部の東南に長さ約8m、幅約10m, 高さ約1.5mの前方部がとりついている。石室の平面が羽子板状をなし、奥に向って右側に立柱状の石を設置しているのが特徴。出土遺物はほとんどないが、６世紀の終わりごろの築造と推定される。

㉕幡立山城跡［市指定］

幡立山城跡は、亀ヶ岳の西、標高約490mの山頂に築造された中世山城。１郭は約30mの長さで、その南に郭が展開する。１郭西寄りには、幡を立てて通信連絡をしたと伝えられる、幡立岩という巨石がある。

幡立山城の南下方には、杉原氏の居城と伝わる八尾山城が存在する。最高所の主郭から八方に延びる尾根に小郭を配し、北側の尾根は堀切などで遮断している。

㉖金龍寺東遺跡［市指定］

平成３年（1991）から継続的に調査し、石積基壇を伴う礎石建物、大形掘立柱建物、板壁建物、苑池状遺構などが確認されている。遺構の周辺からは、鳳凰が陰刻された鬼瓦を含む大量の瓦類のほか、金属器を模倣した須恵器、緑釉陶器、墨書土器などが出土している。苑池状遺構からは、唐三彩の破片が出土した。

㉗孝子畠［市指定］

小堀村の市松は、父庄三郎へ孝養を尽くしたとして、寛政５年（1793）に幕府から褒賞され、市松には銀五枚、父庄三郎には一日米五合宛を生涯賜わった。これを顕彰し、寛政７年（1795）この碑を建立したと伝わる。

㉘義農仁兵衛と庄三郎の墓塔［市指定］

延宝４年（1676）、矢野小田辺に住んでいた仁兵衛・庄三郎の兄弟が、不作による年貢軽減を福山藩に直訴して打首となった。それを顕彰しこの墓塔を造立したと伝えられる。

㉓五弓雪窓の墓［市指定］

五弓雪窓は、学問、特に史学を究め、多くの著述がある。また、福山藩校誠之館の分校として府中郷学を設立し、この郷学が小学校として移管した後は、家塾を開き、多くの子どもの教育に専念した人物である。

㉙翁山城跡（護国山城）［市指定］

比高160mの傾斜急峻な山頂に、約70m×15mの本丸を構え、周囲に延びる尾根には大小の郭、斜面には堅堀などを配置する。『平家物語』で有名な長谷部信連の末裔といわれる長谷部元信の築城と伝わる。

㉔大戸直純の墓［市指定］

大戸直純は、浦上盛栄と共に塾を創立し、多数の子どもを教育した。また、福山藩内では最初に社倉を創設するとともに、福山義倉にも出資して福祉事業を行なった人物である。

府中市の指定文化財

天然記念物

27 行縢八幡神社の大木群［県指定］

社殿の周辺に、ツガ、カヤ、アラカシ、シラカシ、ヤブツバキなどがかなりの大木となって成育しており、低木層に見られるシキミ、シロダモ、アオキ、ネズミモチなどとともに、一部に中間帯自然植生の名残を留めている。群落としては不完全であるが、大木がまとまって生育し、分布生態の上で興味深い樹木を含んでいることは、学術的に価値が高い。

28 井永のシラカシ［県指定］

神木として崇められてきたブナ科の常緑高木。樹幹は空洞になっているが、表皮から新しい枝が出て樹勢は旺盛である。

72 矢野八幡神社のスギ［市指定］

二株のうち一株が落雷で損傷、補修してきたが、平成17年(2005)に伐採整理された。残った一株の樹勢は旺盛である。

75 井永のエノキ［市指定］

井永の法界山麓にあるニレ科の落葉高木。幅１m以上もある長大な「板根」が露出している。

78 清芳園のビャクシン［市指定］

上下合祀神社隣接の清芳園にあるヒノキ科の常緑樹。

81 養源寺のタラヨウ［市指定］

境内西の山麓にあるモチノキ科の常緑高木。葉裏に文字を書くことができるので、葉書きの木・絵書きしばの別名がある。

70 諸毛八幡神社の大スギ［市指定］

胸高周囲5.2m、樹高31mで、府中市第一の巨樹である。落雷により樹の上部が枯死し、樹全体が弱っているのが惜しまれる。

29 矢野のケンポナシ［県指定］

クロウメモドキ科の落葉高木。花柄部が肉質に肥大してナシのような味がするので、子どもたちが好んで噛んでいたという。

73 階見八幡神社のケヤキ［市指定］

ニレ科の落葉高木。巨大な斜幹と秋の紅葉はことさらに見応えがあり、古くから鎮守の森の神木として崇められてきた。

76 井永のヒガンザクラ［市指定］

バラ科の落葉高木。開花が早く美しい。かつては農事の指標木として里人に親しまれたという。

79 河井のナラガシワ［市指定］

河井飢え坂登り口の県道端にあるブナ科の落葉高木。県道上に25mにも及ぶ見事な枝張りを見せている。

82 宇根のトチノキ［市指定］

宇根の山麓にあるトチノキ科の落葉高木。大木とはいえないが、市内では稀少種である。

71 諸毛艮神社のアカガシ［市指定］

胸高周囲3.82m、樹高16m、地上1.7mで二又に別れ、一方が地上2.7mでさらに五本に分岐し、枝張りも良く樹勢の強い、県内有数の巨樹である。

30 国留のヤブツバキ［県指定］

国留の丘陵上にあるツバキ科の常緑中木。樹形、樹勢ともに見事で、毎春、枝一面に赤い花を咲かせる。

74 深江のシダレザクラ［市指定］

深江上高の丘陵にあるバラ科の落葉高木。樹形がよく整っていて、満開時の遠望はことさら見事である。

77 善昌寺のビャクシン［市指定］

善昌寺境内にあるヒノキ科の常緑樹。枝ぶりが見事でいかにも古木の風情がある。

80 河井の石灰岩地植生［市指定］

河井のカルスト台地一帯に自生する植物群。特有の稀少植物をはじめ、北向き急斜面一帯にはカタクリの大群生地がある。

83 合祀神社のシンジュ［市指定］

神社本殿の裏手にあるニガキ科の落葉高木。明治10年代に「神樹」と称して植えられたという。県内では稀に見る大木である。

府中市の遺跡一覧

府中市

番号	名　　称	種　別	時　代
1	諏訪谷古墳	包含地	古墳
2	医光寺谷遺跡	包含地	古代
3	行縢八幡神社遺跡	包含地	弥生・古代
4	向畑窯跡	窯跡	近世
5	小林山城跡	城跡	中世
6	古殿古墓	墳墓	中世
7	松林寺古墓	墳墓	中世
8	小谷遺跡	包含地	弥生
9	西崎遺跡	包含地	古墳・古代
10	和田古墓	墳墓	中世
11	玉禅寺古墓	墳墓	中世
12	山根古墳	古墳	古墳
13	郷空古墓	墳墓	中世
14	重信古墳	古墳	古墳
15	郷上大師堂	祭祀跡	近世
16	中間古墳	古墳	古墳
17	曽根田遺跡	包含地	弥生
18	安全寺古墓	墳墓	中世
19	楢崎城跡	城跡	中世
20	宮本古墓	墳墓	中世
21	久佐八幡神社遺跡	包含地	中世
22	権現第1号古墳	古墳	古墳
23	権現第2号古墳	古墳	古墳
24	下永野古墳	古墳	古墳
25	永野古墓	墳墓	中世
26	諸毛本郷古墓	墳墓	中世
27	諸毛本郷1号古墳	古墳	古墳
28	諸毛本郷2号古墳	古墳	古墳
29	諸毛本郷3号古墳	古墳	古墳
30	堂ケ原古墳	古墳	古墳
31	堂ケ原遺跡	墳墓	弥生～古墳
32	後谷遺跡	包含地	弥生
33	長者原遺跡	包含地	古代～中世？
34	二本木遺跡	包含地	中世
35	三室山盤座	祭祀跡	古代
36	甘南備神社北遺跡	包含地	不明
37	甘南備神社遺跡	包含地	弥生～中世
38	甘南備神社南遺跡	包含地	古代
39	神田耕地遺跡	包含地	弥生・中世
40	片山遺跡	包含地	弥生
41	尾立山第1号古墳	古墳	古墳
42	尾立山第2号古墳	古墳	古墳
43	尾立山第3号古墳	古墳	古墳
44	尾立山第4号古墳	古墳	古墳
45	尾立山第5号古墳	古墳	古墳
46	黒金塚古墳	古墳	古墳
47	羽中遺跡	包含地	弥生～中世
48	新宮神社北遺跡	包含地	中世？
49	羽中南遺跡	包含地	弥生・古代
50	辻高居西遺跡	官衙？	古代
51	辻高居東遺跡	集落？	弥生・古代
52	洞仙焼窯跡	窯跡	近世
53	出口新町遺跡	官衙など	古代
54	辻横田遺跡	官衙など	古墳～中世
55	鳥羽遺跡	包含地	弥生～中世
56	仲谷遺跡	包含地	中世
57	チョコシ遺跡	包含地	弥生・古代
58	加一遺跡	包含地	中世
59	青目寺跡	寺院跡	平安～室町
60	常城跡推定地	城跡	古代
61	旗立山城跡	城跡	中世
62	亀ケ岳遺跡	包含地	古代
63	青目寺観音堂遺跡	寺院跡	中世～近世
64	うしの塔古墓	墳墓	平安～鎌倉
65	八尾山城跡	城跡	中世
66	竹田峠古墳	古墳	古墳
67	峠の坊遺跡	包含地	不明
68	諏訪神社遺跡	包含地	古代
69	竹田古墳	古墳	古墳
70	西谷遺跡	包含地	古代～中世
71	石垣古墳	古墳	古墳
72	石垣遺跡	集落	弥生・古代
73	日吉神社遺跡	祭祀跡・他	平安～中世
74	日吉中谷古墳	古墳	古墳
75	助宗古墳	古墳	古墳
76	本山古墳	古墳	古墳
77	伊勢地岡遺跡	包含地	古代
78	伊勢地遺跡	不明	古墳・古代
79	宝泉坊古墳	古墳	古墳
80	宝泉坊遺跡	包含地	古墳～中世
81	ヒランマル第1号古墳	古墳	古墳
82	ヒランマル第2号古墳	古墳	古墳
83	松山古墳	古墳	古墳
84	門田A遺跡	墳墓	弥生・古代
85	門田第1号古墳	古墳	古墳
86	門田第2号古墳	古墳	古墳
87	中山遺跡	墳墓	弥生？
88	下辻遺跡	包含地	弥生・古代
89	下才田遺跡	包含地	弥生～中世
90	横井遺跡	包含地	弥生
91	前原遺跡	官衙跡・包含地	縄文～中世
92	上前原遺跡	包含地	古代
93	前原古墳	古墳	古墳
94	藪堂遺跡	包含地	縄文・弥生
95	川崎遺跡	包含地	弥生
96	法全坊遺跡	包含地	縄文～古墳
97	下川辺遺跡	包含地	縄文
98	河面谷古墓	墳墓	中世
99	番蔵古墓	墳墓	中世
100	番蔵第1号古墳	古墳	古墳
101	番蔵第2号古墳	古墳	古墳
102	盾石遺跡	祭祀跡	弥生
103	段ケ市古墓	墳墓	中世
104	段ケ市遺跡	散布地	弥生
105	段ケ市丸山古墓	墳墓	中世
106	矢谷第1号古墳	古墳	古墳
107	矢谷第2号古墳	古墳	古墳
108	矢谷第3号古墳	古墳	古墳
109	矢谷第4号古墳	古墳	古墳
110	坂本第1号古墳	古墳	古墳
111	坂本第2号古墳	古墳	古墳
112	三郎丸観音谷第1号古墳	古墳	古墳
113	三郎丸観音谷第2号古墳	古墳	古墳
114	三郎丸観音谷第3号古墳	古墳	古墳
115	三郎丸観音谷第4号古墳	古墳	古墳
116	三郎丸観音谷第5号古墳	古墳	古墳
117	三郎丸観音谷第6号古墳	古墳	古墳
118	土井の下古墓	墳墓	中世
119	山の神古墳	古墳	古墳
120	三郎丸古墓	墳墓	中世
121	伝吉田寺跡	寺院跡	古代
122	金龍寺東遺跡	寺院跡・官衙	古代～中世
123	門田池南遺跡	包含地	縄文～古代
124	ドウジョウ遺跡	包含地	古代～中世
125	砂山遺跡	官衙など	古墳～中世
126	門ノ前遺跡	包含地	古代～中世
127	六地蔵遺跡	集落	中世
128	坊迫A遺跡	墳墓など	弥生～近世
129	坊迫A第1号古墳	古墳	古墳
130	坊迫A第2号古墳	古墳	古墳
131	坊迫A第3号古墳	古墳	古墳
132	坊迫B遺跡	包含層	中世
133	坊迫C遺跡	寺院跡？	古代～中世
134	坊迫宝塔	その他	中世
135	池ノ迫遺跡	墳墓・城跡	弥生・中世
136	池ノ迫第1号古墳	古墳	古墳
137	山の神遺跡群	墳墓など	弥生・中世
138	山の神第1号古墳	古墳	古墳
139	山の神第2号古墳	古墳	古墳
140	山の神第3号古墳	古墳	古墳
141	山の神第4号古墳	古墳	古墳
142	池ノ迫奥遺跡	城跡	中世
143	ホリノ河内遺跡	集落	弥生～中世
144	ツジ遺跡	官衙跡・集落跡	弥生～古代
145	潮音寺山遺跡	包含地	弥生
146	上田山遺跡	包含地	弥生
147	鳥居遺跡	包含地	古墳～古代
148	田中遺跡	集落	古代～中世
149	二宮神社遺跡	包含地	古代～中世
150	溝手遺跡	集落	中世
151	野屋の木古墳	古墳	古墳
152	野屋遺跡	包含地	弥生～古代
153	五反畑遺跡	包含地	弥生～古代
154	後開地遺跡	包含地	古代
155	柴垣遺跡	包含地	弥生～古代
156	小寺遺跡	包含地	古代～中世
157	辰山遺跡	包含地	弥生～中世
158	土井遺跡	包含地	弥生～古墳
159	巳の口山遺跡	包含地	弥生
160	巳の口山古墳	古墳	古墳
161	梶屋遺跡	包含地	弥生～古代
162	堂脇古墳	古墳	古墳
163	淵上城跡	城跡	中世
164	樋口古墳	古墳	古墳
165	河南八幡神社遺跡	包含地	弥生・中世
166	福輪塚第1号古墳	古墳	古墳
167	福輪塚第2号古墳	古墳	古墳
168	寺の下西遺跡	集落など	縄文～中世
169	広畑遺跡	墳墓など	古代～中世
170	清水遺跡	包含地	古代
171	服部田遺跡	集落	弥生～中世

府中市の遺跡一覧

番号	名　　称	種　別	時　代
172	東槇木山B遺跡	城跡	中世
173	東槇木山第1号古墳	古墳	古墳
174	東槇木山第2号古墳	古墳	古墳
175	東槇木山第3号古墳	古墳	古墳
176	東槇木山第4号古墳	古墳	古墳
177	下塚原遺跡	包含地	弥生～古代
178	川原遺跡	包含地	弥生～古代
179	小林遺跡	包含地	弥生～古代
180	寺ノ前遺跡	官衙など	弥生・古代
181	龍王山D第1号古墳	古墳	古墳
182	龍王山D第2号古墳	古墳	古墳
183	龍王山D第3号古墳	古墳	古墳
184	龍王山A第1号古墳	古墳	古墳
185	龍王山A第2号古墳	古墳	古墳
186	龍王山A第3号古墳	古墳	古墳
187	龍王山A第4号古墳	古墳	古墳
188	龍王山B第1号古墳	古墳	古墳
189	龍王山B第2号古墳	古墳	古墳
190	龍王山C第1号古墳	古墳	古墳
191	内堀西A遺跡	墳墓	弥生～古墳
192	内堀西B遺跡	墳墓	弥生・古墳
193	内堀東遺跡	墳墓	弥生～古墳
194	打堀山B遺跡	墳墓	平安
195	打堀山B第1号古墳	古墳	古墳
196	打堀山B第2号古墳	古墳	古墳
197	打堀山B第3号古墳	古墳	古墳
198	清財遺跡	包含地	古代
199	打堀山C遺跡	集落	弥生・古代
200	打堀山A遺跡	墳墓	弥生
201	打堀山A第1号古墳	古墳	古墳
202	町田遺跡	包含地	古代
203	角尾山遺跡	包含地	平安
204	角尾遺跡	包含地	弥生・古代
205	森谷遺跡	包含地	弥生～古代
206	大迫谷西遺跡	包含地	古代？
207	大迫谷遺跡	包含地	古代～中世
208	大坪遺跡	包含地	奈良
209	西ノ前遺跡	包含地	古代～中世
210	鳶尾城跡	城跡	中世
211	木曽丸遺跡	墳墓	中世
212	伊豆迫山遺跡	墳墓など	弥生・古代
213	平佐山遺跡	集落など	弥生・中世・近世
214	平佐遺跡	包含地	弥生・古代
215	雄立古墳	古墳	古墳
216	城山第1号古墳	古墳	古墳
217	城山第2号古墳	古墳	古墳
218	城山第3号古墳	古墳	古墳
219	実蔵坊遺跡	包含地	弥生～中世
220	森脇遺跡	集落	弥生
221	黄番後山遺跡	墳墓	弥生～古墳
222	山手遺跡群	包含地	弥生～古墳
223	横見遺跡	包含地	弥生～古墳
224	御門遺跡	包含地	弥生～中世
225	御門ジョー古墳	古墳	古墳
226	大久保遺跡	集落	弥生～古墳
227	南宮後山遺跡	墳墓	弥生・古代
228	南宮後山第1号古墳	古墳	古墳
229	岡谷遺跡	包含地	古代～中世
230	本木遺跡	包含地	古代～中世
231	亀寿山城跡	城跡	中世
232	ウロウギ遺跡	包含地	奈良
233	宇呂木第1号古墳	古墳	古墳
234	宇呂木第2号古墳	古墳	古墳
235	宇呂木第3号古墳	古墳	古墳
236	宇呂木第4号古墳	古墳	古墳
237	宇呂木第5号古墳	古墳	古墳
238	宇呂木第6号古墳	古墳	古墳
239	赤迫遺跡	包含地	古代～中世
240	御旅古墳	古墳	古墳
241	御旅遺跡	墳墓	弥生～古墳
242	向山遺跡	包含地	弥生・古代
243	相方城跡	城跡	中世
244	千原遺跡	墳墓	弥生～古墳
245	千原古墳	古墳	古墳
246	勅使峠遺跡	包含地	古代
247	平井古墳	古墳	古墳
248	茶臼山城跡	城跡	中世
249	茶臼山古墓	墳墓	中世
250	茶臼山第1号古墳	古墳	古墳
251	茶臼山第2号古墳	古墳	古墳
252	茶臼山第3号古墳	古墳	古墳
253	茶臼山山頂遺跡	包含地	弥生～古墳
254	長迫西遺跡	包含地	弥生～古墳
255	長迫東遺跡	包含地	不詳
256	平井北遺跡	包含地	弥生
257	平井南遺跡	包含地	弥生
258	王子塚古墳	古墳	古墳
259	御池遺跡	包含地	弥生～中世
260	南宮神社遺跡	包含地	古代～中世
261	神宮寺西遺跡	包含地	中世？
262	七御陵古墳	古墳	古墳
263	名字向古墳	古墳	古墳
264	戸木窯跡	窯跡	古代
265	トロモ遺跡	包含地	古墳
266	栗柄廃寺	寺院跡など	弥生～古代
267	ノーラ古墳	古墳	古墳
268	寺山第1号古墳	古墳	古墳
269	寺山第2号古墳	古墳	古墳
270	寺山遺跡	墳墓	中世～近世
271	西龍寺東遺跡	墳墓	中世
272	四日市西遺跡	包含地	古代～中世
273	四日市遺跡	包含地	縄文～弥生
274	安江古墳	古墳	古墳
275	安江遺跡	包含地	古代～中世
276	中柴北遺跡	包含地	古墳～中世
277	中柴遺跡	包含地	古代～中世
278	中柴南遺跡	包含地	古代
279	大迫古墳	古墳	古墳
280	加谷奥山古墳	古墳	古墳
281	アテガワテ古墳	古墳	古墳
282	原ノ池古墳	古墳	古墳
283	馬背古墳	古墳	古墳
284	厚葉古墳	古墳	古墳
285	先厚葉第1号古墳	古墳	古墳
286	先厚葉第2号古墳	古墳	古墳
287	先厚葉第3号古墳	古墳	古墳
288	鴫谷西第1号古墳	古墳	古墳
289	鴫谷西第2号古墳	古墳	古墳
290	鴫谷西第3号古墳	古墳	古墳
291	鴫谷西第4号古墳	古墳	古墳
292	鴫谷西第5号古墳	古墳	古墳
293	鴫谷西遺跡	包含地	中世？
294	鴫谷遺跡	包含地	弥生
295	鴫谷南遺跡	包含地	弥生
296	鴫谷古墳	古墳	古墳
297	府中市街地遺跡群	官衙・集落跡	縄文～中世
298	青木古墳※	古墳	古墳
299	王免寺遺跡	包含地	中世
300	王免寺古墳	古墳	古墳
301	坂本坊遺跡	包含地	中世
302	元町東遺跡	官衙など	弥生～古代
303	カラス田遺跡	包含地	弥生～古代
304	砂原遺跡	集落	縄文～中世
305	岡屋遺跡	タタラ跡	不明
306	大マヘ遺跡	官衙跡・集落跡	古代

※は所在不明

上下町

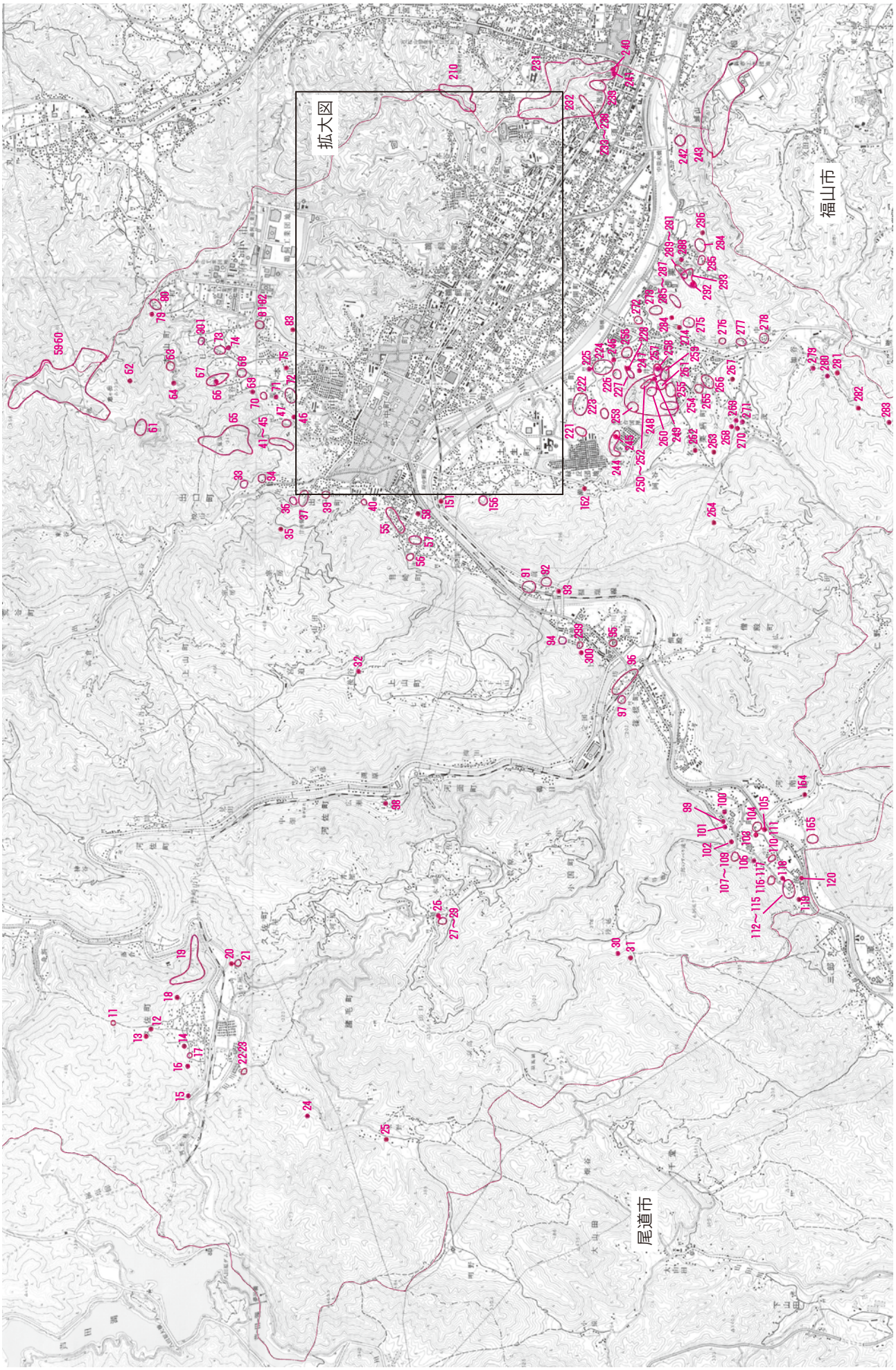
番号	名　　称	種　別	時　代
J1	小塚古墳	古墳	古墳
J2	小塚城跡	城跡	中世
J3	風呂屋第1号古墳	古墳	古墳
J4	風呂屋第2号古墳	古墳	古墳
J5	久保山城跡	城跡	中世
J6	小塚八幡神社前古墓	墓	不明
J7	小塚中山第1号古墳	古墳	古墳
J8	小塚中山第2号古墳	古墳	古墳
J9	小塚中山第3号古墳	古墳	古墳
J10	小塚中山第4号古墳	古墳	古墳
J11	小塚中山第5号古墳	古墳	古墳
J12	小塚中山第6号古墳	古墳	古墳
J13	小塚中山第7号古墳	古墳	古墳
J14	小塚中山第8号古墳	古墳	古墳
J15	小塚中山第9号古墳	古墳	古墳
J16	竜の口古墳	古墳	古墳
J17	吉森第1号古墳	古墳	古墳
J18	吉森第2号古墳	古墳	古墳
J19	迫の峠第1号古墳	古墳	古墳
J20	迫の峠第2号古墳	古墳	古墳
J21	迫の峠第3号古墳	古墳	古墳
J22	通力第1号古墳	古墳	古墳
J23	通力第2号古墳	古墳	古墳
J24	通力第3号古墳	古墳	古墳
J25	通力第4号古墳	古墳	古墳
J26	通力第5号古墳	古墳	古墳
J27	三見城跡	城跡	中世
J28	宗兵衛山古墳	古墳	古墳
J29	平田城跡	城跡	中世
J30	平田第1号古墳	古墳	古墳
J31	平田第2号古墳	古墳	古墳
J32	石塔平塚古墳	古墳	古墳
J33	城跡	城跡	中世
J34	有福城跡	城跡	中世
J35	嵯峨山古墳	古墳	古墳
J36	大畔塚第1号古墳	古墳	古墳
J37	大畔塚第2号古墳	古墳	古墳
J38	上下小学校裏古墳	古墳	古墳
J39	翁山城跡	城跡	中世
J40	丹下城跡	城跡	中世
J41	天領上下代官所跡	代官所跡	近世

府中市の遺跡一覧

番号	名　　称	種　別	時　代
J42	道城遺跡	集落跡	弥生～古墳
J43	上下高校古墳	古墳	古墳
J44	森荒神第1号古墳	古墳	古墳
J45	森荒神第2号古墳	古墳	古墳
J46	三須磨第1号古墳	古墳	古墳
J47	三須磨第2号古墳	古墳	古墳
J48	三須磨第3号古墳	古墳	古墳
J49	三須磨第4号古墳	古墳	古墳
J50	三須磨第5号古墳	古墳	古墳
J51	三須磨第6号古墳	古墳	古墳
J52	三須磨第7号古墳	古墳	古墳
J53	三須磨第8号古墳	古墳	古墳
J54	下谷西奥古墳	古墳	古墳
J55	下谷岸古墳	古墳	古墳
J56	平迫第1号古墳	古墳	古墳
J57	平迫第2号古墳	古墳	古墳
J58	平迫第3号古墳	古墳	古墳
J59	平迫第4号古墳	古墳	古墳
J60	中山第1号古墳	古墳	古墳
J61	中山第2号古墳	古墳	古墳
J62	中山第3号古墳	古墳	古墳
J63	中山第4号古墳	古墳	古墳
J64	中山第5号古墳	古墳	古墳
J65	中山第6号古墳	古墳	古墳
J66	中山第7号古墳	古墳	古墳
J67	中山第8号古墳	古墳	古墳
J68	中山第9号古墳	古墳	古墳
J68	上高第1号古墳	古墳	古墳
J70	上高第2号古墳	古墳	古墳
J71	大仙平第1号古墳	古墳	古墳
J72	大仙平第2号古墳	古墳	古墳
J73	大仙平第3号古墳	古墳	古墳
J74	時鳥城跡	城跡	中世
J75	時鳥古墳	古墳	古墳
J76	扇峠古墳	古墳	古墳
J77	千丸松城跡	城跡	中世
J78	国留城跡	城跡	中世
J79	上高城跡	城跡	中世
J80	薄古山城跡	城跡	中世
J81	薄古第1号古墳	古墳	古墳
J82	薄古第2号古墳	古墳	古墳
J83	薄古第3号古墳	古墳	古墳
J84	薄古第4号古墳	古墳	古墳
J85	薄古第5号古墳	古墳	古墳
J86	浄円寺山第1号古墳	古墳	古墳
J87	浄円寺山第2号古墳	古墳	古墳
J88	浄円寺山第3号古墳	古墳	古墳
J89	浄円寺山第4号古墳	古墳	古墳
J90	浄円寺山第5号古墳	古墳	古墳
J91	浄円寺山第6号古墳	古墳	古墳
J92	浄円寺山第7号古墳※	古墳	古墳
J93	浄円寺山第8号古墳※	古墳	古墳
J94	浄円寺山第9号古墳※	古墳	古墳
J95	浄円寺山第10号古墳※	古墳	古墳
J96	浄円寺山第11号古墳※	古墳	古墳
J97	浄円寺山第12号古墳※	古墳	古墳
J98	浄円寺山第13号古墳※	古墳	古墳
J99	薄古山第1号古墳	古墳	古墳
J100	薄古山第2号古墳	古墳	古墳
J101	薄古山第3号古墳	古墳	古墳
J102	薄古山第4号古墳	古墳	古墳
J103	薄古山第5号古墳	古墳	古墳
J104	薄古山第6号古墳	古墳	古墳
J105	薄古山第7号古墳	古墳	古墳
J106	薄古山第8号古墳	古墳	古墳
J107	薄古山第9号古墳	古墳	古墳
J108	薄古山第10号古墳	古墳	古墳
J109	薄古山第11号古墳	古墳	古墳
J110	薄古山第12号古墳	古墳	古墳
J111	薄古山第13号古墳	古墳	古墳
J112	薄古山第14号古墳	古墳	古墳
J113	薄古山第15号古墳	古墳	古墳
J114	大倉原遺跡	集落跡	古墳
J115	岩風呂第1号古墳	古墳	古墳
J116	岩風呂第2号古墳	古墳	古墳
J117	岩風呂第3号古墳	古墳	古墳
J118	岩風呂第4号古墳	古墳	古墳
J119	岩風呂第5号古墳	古墳	古墳
J120	岩風呂第6号古墳	古墳	古墳
J121	岩風呂第7号古墳	古墳	古墳
J122	岩風呂第8号古墳	古墳	古墳
J123	無念寺第1号古墳	古墳	古墳
J124	無念寺第2号古墳	古墳	古墳
J125	無念寺第3号古墳	古墳	古墳
J126	無念寺第4号古墳	古墳	古墳
J127	無念寺第5号古墳	古墳	古墳
J128	無念寺第6号古墳	古墳	古墳
J129	塚足遺跡	集落跡	縄文～中世
J130	小田迫遺跡	集落跡	古墳
J131	日掛城跡	城跡	中世
J132	安福寺宝篋印塔	墓	中世
J133	下郷桑原遺跡	集落跡	弥生～古代
J134	大和遺跡A地点	集落跡	縄文～古代
J135	湯川古墳	古墳	古墳
J136	洞山第1号古墳	古墳	古墳
J137	洞山第2号古墳	古墳	古墳
J138	洞山第3号古墳	古墳	古墳
J139	洞山第4号古墳	古墳	古墳
J140	洞山第5号古墳	古墳	古墳
J141	洞山第6号古墳	古墳	古墳
J142	高鉢山城跡	城跡	中世
J143	仁和田古墳	古墳	古墳
J144	好迫第1号古墳	古墳	古墳
J145	好迫第2号古墳	古墳	古墳
J146	好迫第3号古墳	古墳	古墳
J147	好迫第4号古墳	古墳	古墳
J148	寺奥第1号古墳	古墳	古墳
J149	寺奥第2号古墳	古墳	古墳
J150	防地奥古墳	古墳	古墳
J151	防地第1号古墳	古墳	古墳
J152	防地第2号古墳	古墳	古墳
J153	堀奥古墳	古墳	古墳
J154	箱山古墳	古墳	古墳
J155	越谷古墳	古墳	古墳
J156	矢多田城跡	城跡	中世
J157	新山城跡	城跡	中世
J158	古城峠第1号古墳※	古墳	古墳
J159	古城峠第2号古墳※	古墳	古墳
J160	扇原第1号古墳	古墳	古墳
J161	扇原第2号古墳	古墳	古墳
J162	扇原遺跡	包含地	縄文
J163	井永城跡	城跡	中世
J164	山の神第1号古墳	古墳	古墳
J165	山の神第2号古墳	古墳	古墳
J166	山の神第3号古墳	古墳	古墳
J167	豆丸尻古墳	古墳	古墳
J168	木原古墳	古墳	古墳
J169	南山西古墳	古墳	古墳
J170	南山第1号古墳	古墳	古墳
J171	南山第2号古墳	古墳	古墳
J172	南山第3号古墳	古墳	古墳
J173	平山第1号古墳	古墳	古墳
J174	平山第2号古墳	古墳	古墳
J175	二反田第1号古墳	古墳	古墳
J176	二反田第2号古墳	古墳	古墳
J177	二反田第3号古墳	古墳	古墳
J178	二反田第4号古墳	古墳	古墳
J179	二反田第5号古墳	古墳	古墳
J180	平松古墳	古墳	古墳
J181	肉原古墳	古墳	古墳
J182	屏風山古墳	古墳	古墳
J183	殿居古墳	古墳	古墳
J184	萩山第1号古墳	古墳	古墳
J185	萩山第2号古墳	古墳	古墳
J186	萩山第3号古墳	古墳	古墳
J187	奥の院第1号古墳	古墳	古墳
J188	奥の院第2号古墳	古墳	古墳
J189	奥の院第3号古墳	古墳	古墳
J190	奥の院第4号古墳	古墳	古墳
J191	そね第1号古墳	古墳	古墳
J192	そね第2号古墳	古墳	古墳
J193	行年遺跡	集落跡	縄文～古墳
J194	中居遺跡	包含地	弥生
J195	釈迦丸第1号古墳	古墳	古墳
J196	釈迦丸第2号古墳	古墳	古墳
J197	釈迦丸第3号古墳	古墳	古墳
J198	釈迦丸第4号古墳	古墳	古墳
J199	釈迦丸第5号古墳	古墳	古墳
J200	階見城跡	城跡	中世
J201	塔のそね古墳	古墳	古墳
J202	清滝城跡	城跡	中世
J203	中居古墳	古墳	古墳
J204	塚野田第1号古墳	古墳	古墳
J205	塚野田第2号古墳	古墳	古墳
J206	塚野田第3号古墳	古墳	古墳
J207	塚野田第4号古墳	古墳	古墳
J208	塚野田第5号古墳	古墳	古墳
J209	篠原第1号古墳	古墳	古墳
J210	篠原第2号古墳	古墳	古墳
J211	篠原第3号古墳	古墳	古墳
J212	篠原第4号古墳	古墳	古墳
J213	篠原東第1号古墳	古墳	古墳
J214	篠原東第2号古墳	古墳	古墳
J215	篠原東第3号古墳	古墳	古墳
J216	篠原東第4号古墳	古墳	古墳
J217	篠原東第5号古墳	古墳	古墳
J218	篠原東第6号古墳	古墳	古墳
J219	篠原東第7号古墳	古墳	古墳
J220	大倉原古墳	古墳	古墳

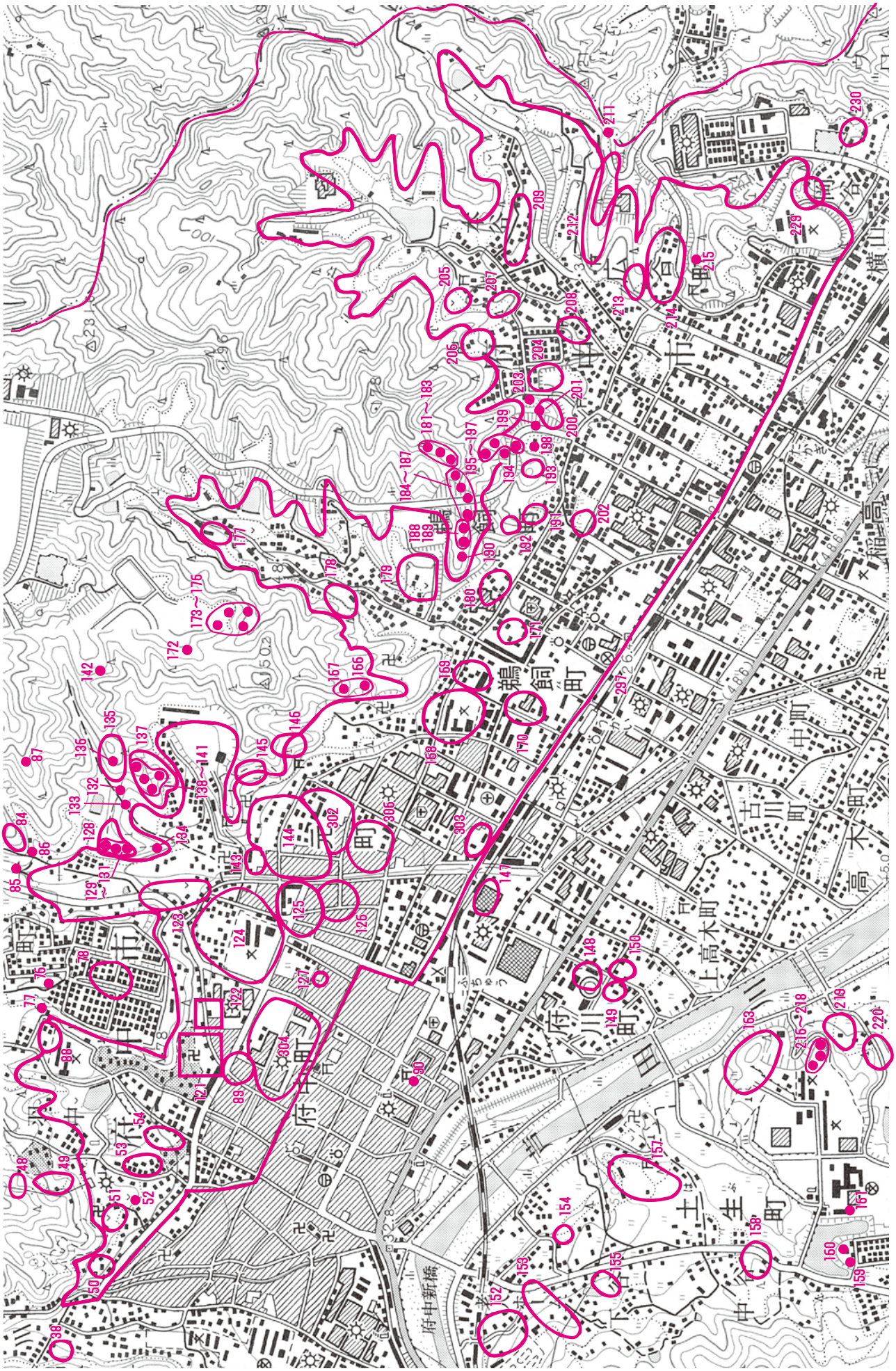
※は所在不明

府中市の遺跡地図



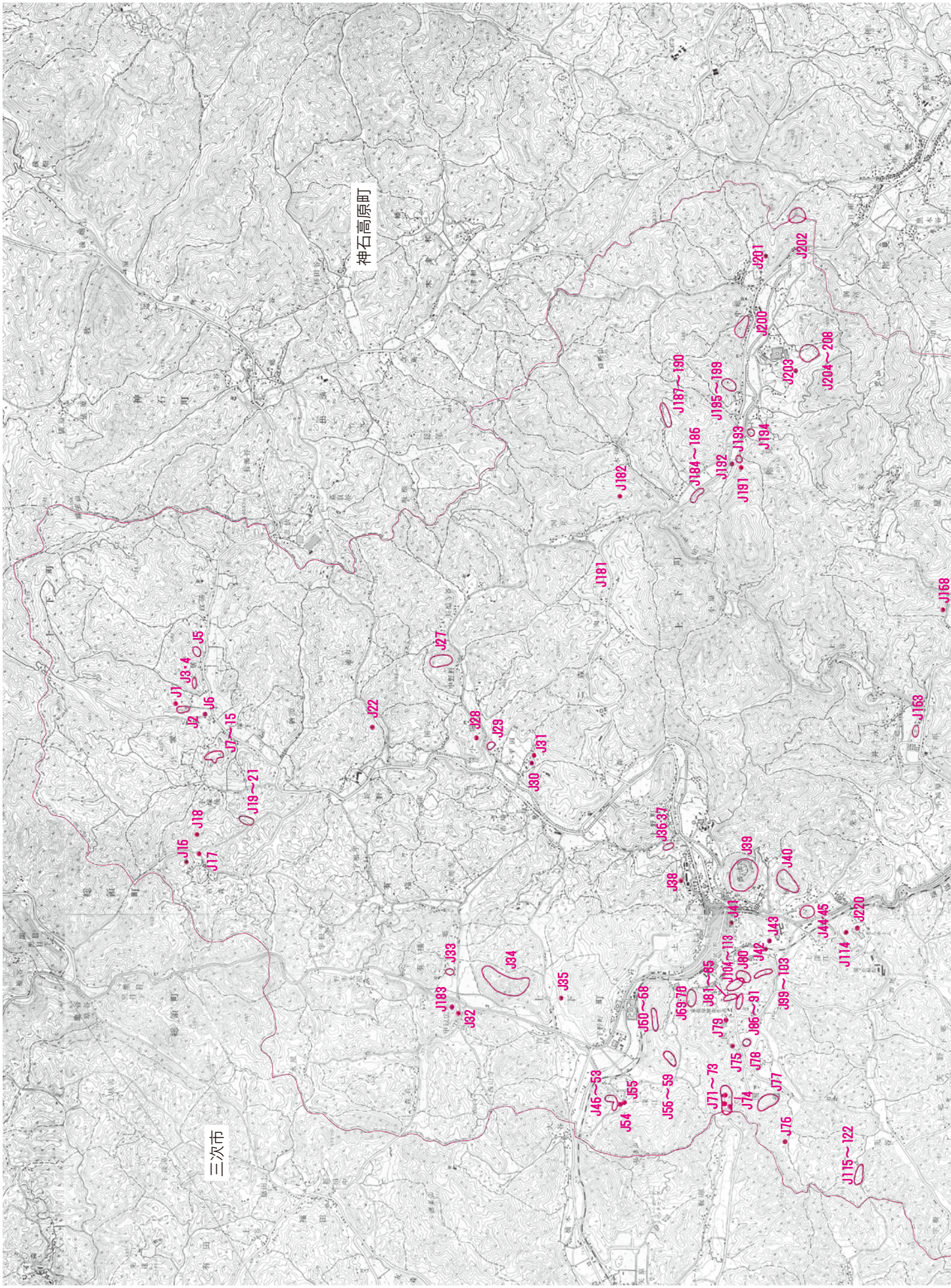
府中市遺跡地図（1：50,000）

府中市の遺跡地図

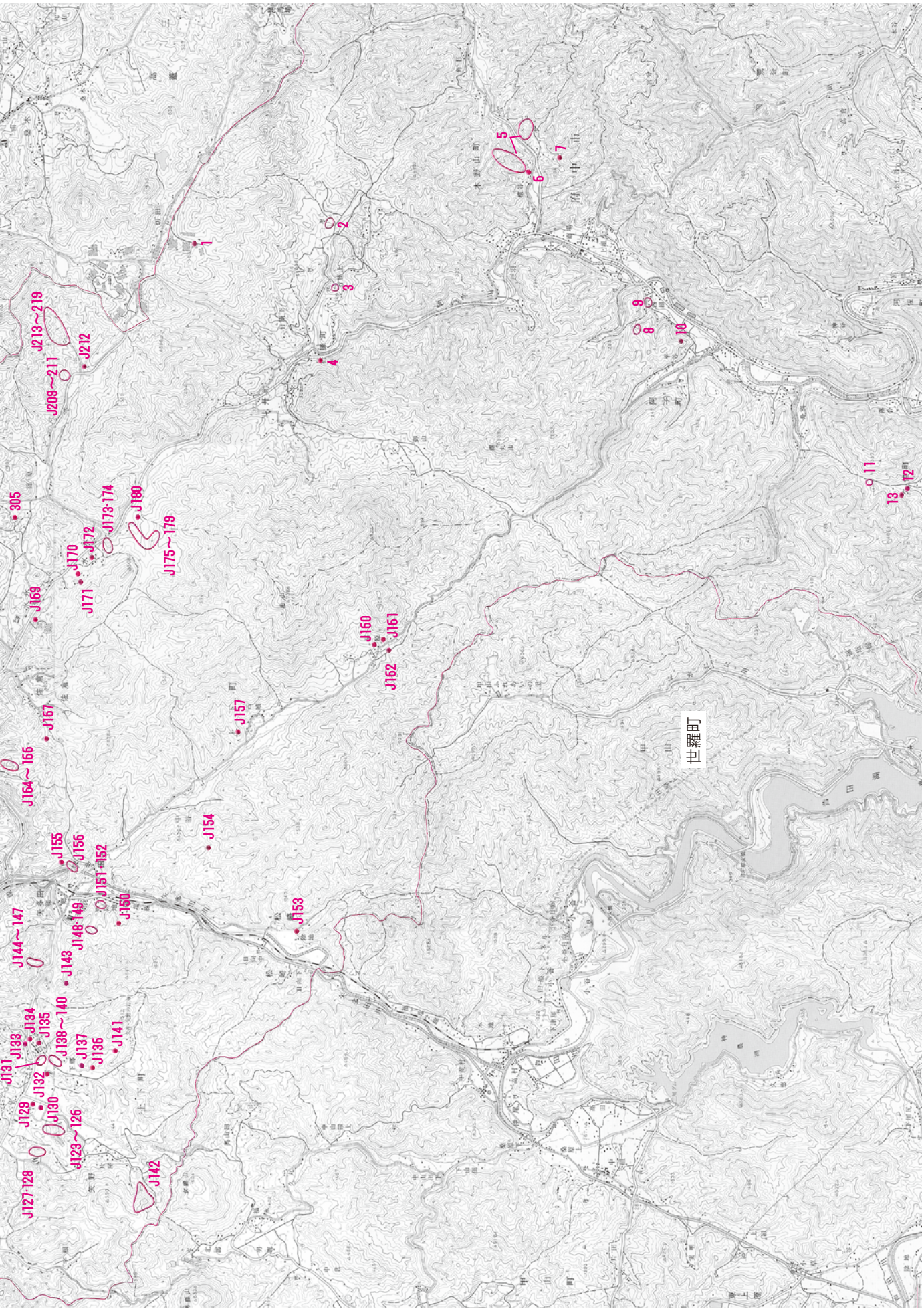


府中市街地遺跡地図（1:15,000）

府中市の遺跡地図


神石高原町
三次市
J1
J2
J3・4
J5
J6
J7～15
J16
J17
J18
J19～21
J22
J27
J28
J29
J30
J31
J32
J33
J34
J35
J36・37
J38
J39
J40
J41
J42
J43
J44・45
J46～53
J54
J55
J56～59
J50～68
J69・70
J71～73
J74
J75
J76
J77
J78
J79
J80
J81～85
J86～91
J99～103
J104～113
J114
J115～122
J163
J168
J181
J182
J183
J184～186
J187～190
J191
J192
J193
J194
J195～199
J200
J201
J202
J203
J204～208
J220

府中市の遺跡地図



府中市遺跡地図（1:50,000）

世紀	時代
B.C.	旧石器
	縄文
A.D. 1	弥生
2	
3	
4	古墳
5	
6	
7	飛鳥
8	奈良
9	平安
10	
11	
12	
13	鎌倉
14	南北朝
	室町
15	戦国
16	安土桃山
17	江戸
18	
19	明治
20	大正
	昭和
21	平成

指定文化財一覧
遺跡一覧

府中市の文化財マップ

上下エリア
府中エリア
保泉寺
㉕有福城跡
432
上下歴史文化資料館（旧岡田邸）
府中北市民病院
専教寺
亀山八幡神社
翁座
旧田辺邸
上下キリスト教会
白壁の町並み
上下川
❹上下町商工会館（旧上下警察署庁舎）
㉔深江のシダレザクラ
じょうげ
上下支所
㉟国留八幡神社棟札
㉚国留のヤブツバキ
㉔天領上下代官所跡
㉘清芳園のビャクシン
㉝合祀神社のシンジュ
湯が丘病院
吉井寺
玉泉寺
⑰木造薬師如来坐像
㉙翁山城址
善昌寺
㉛善昌寺座禅堂
㉜善昌寺鶯張り廊下
㉗善昌寺のビャクシン
㉜宇根のトチノキ
㉙矢野のケンポナシ
福泉寺
矢野温泉
上下ふるさと産品センター
矢野八幡神社
㉑矢野の神儀
㉒矢野八幡神社のスギ
安福寺
⑯石造宝篋印塔
㉟安福寺の宝塔
㉘義農仁兵衛と庄三郎の墓塔
宇根かたくりの里
㉞矢野（宇根）の火道角礫岩の露頭
あやめ園キャンプ場四季彩工房
びんごやの
井永八幡神社
㉖井永のヒガンザクラ
㉘井永のシラカシ
㉟井永八幡神社大般若波羅密多経
㉛井永八幡神社祭礼行事
大歳神社
㉙井永のエノキ
㉖南山古墳
㊼水永大歳神社大般若波羅密多経
㊾大歳神社大数珠
岳山
藩境石
女鹿山
❶久井・矢野の岩海
㉗行滕八幡神社の大木群
行滕八幡神社
びんごみかわ
阿字八幡神社
24
龍王山
㊼孝子畠
㉞長福寺の無縫塔
㉚河井の石灰岩地植生
㉙河井のナラガシワ
上下屏風洞洞窟遺跡
行年遺跡
階見八幡神社
養源寺
⑱階見の若宮信仰資料
㉘階見八幡神社のケヤキ
㉛養源寺のタラヨウ
七ツ池自然公園
㉒青目寺跡
亀ヶ岳
㉞石造五輪塔（うしの塔）
青目寺
❼青目寺塔婆（五層石塔婆）
❽木造日光菩薩立像
❾木造月光菩薩立像
❶木造聖観音立像
❷木造天部立像（2躯）
❹五輪塔形曳覆曼荼羅はんぎ
㉝木造僧形坐像
㊴青目寺石造水鉢
㉟幡立山城跡
❿日吉神社宝塔
㊾日吉神社本殿
日吉神社
ぼんじ岩
八ツ尾城跡
工業団地
三室公園
甘南備神社
㊳洞仙焼御神酒徳利
㊹大戸直純の墓
㊼府中八幡神社末社天満宮本殿
見晴団地
桜が丘団地
㊸五弓雪窓の墓
首無地蔵
399
❷延藤家住宅洋館・和館
出口の町並み
金龍寺
㉓伝吉田寺
㊻金龍寺東遺跡
㊵坊迫宝塔
栄明寺
❺金銅仏具
⑮木造阿弥陀如来坐像
㊸銅鐘
㊹木造薬師如来坐像
㊺紺紙金泥大般若波羅密多経
❸恋しき
㊿金毘羅神社石燈籠（日本一の石燈籠）
ツジ遺跡
十輪院
常福寺
㊶常福寺石造水鉢
広谷東観音山
伊豆迫山遺跡
保健福祉総合センターリ・フレ
河佐峡
八田原ダム
楢崎城跡
パークゴルフ場
かわさ
なかはた
㉑諸毛艮神社のアカガシ
諸毛八幡神社
河面谷民俗資料館
㉚諸毛八幡神社の大スギ
明浄寺
こどもの国 POM
安楽寺
生涯学習センター
㊴日吉神社府川石鳥居
ふちゅう
消防署
図書館
文化センター
鳥居遺跡
府中市役所
警察署
うかい
砂川
486
たかぎ
前原遺跡
総合体育館
しもかわべ
藩境石
羽高湖サン・スポーツランド
三郎の滝
㊷旧芦品郡役所庁舎（府中市歴史民俗資料館）
芦田川
オオムラサキの里
御調川
❻版本大般若経（600巻）
⑬絹本着色釈迦十六善神像
南宮神社
神宮寺
㊱木造阿弥陀如来坐像
㊽南宮神社本殿
㊾南宮神社鐘撞堂・随身門
県道府中松永線
48
西龍寺

府中市の資料館案内

府中市の歴史については、次の施設で詳しく知ることができます。

府中市歴史民俗資料館

明治36年竣工の旧芦品郡役所庁舎を利用した資料館で、府中市の歴史を解説しています。

１階は府中市名の由来にもなっている「備後国府」の関連資料を多く常設展示し、国府の時代の復元衣装が彩りを添えています。

国府衣装の体験が人気です。

所在地	〒726-0021　府中市土生町822-2
開館時間	午前10時～午後５時
休館日	祝日を除く月曜日と年末年始
入館料	無料
問い合わせ先	電話：0847-43-4646

府中市上下歴史文化資料館

上下出身の作家岡田美知代の生家を改築した建物で、軒先などに昔の面影が残っています。

展示内容は、１階に上下の歴史と、岡田美知代の生涯にスポットをあてた展示のほか、上下の民話を紹介したコーナーを設けています。

上下白壁の町並みの観光拠点であり、観光案内所として上下の魅力も発信しています。

所在地	〒729-3431　府中市上下町上下1006
開館時間	午前10時～午後６時
休館日	祝日を除く月曜日と年末年始 ※上下ひなまつり中は無休
入館料	無料
問い合わせ先	電話：0847-62-3999

ふるさとの歴史 ー遺跡と文化財からみた府中ー

平成26年２月28日 発行

編集・発行　府中市教育委員会　〒726-0003 広島県府中市元町1-5
印　　刷　有限会社コトブキ印刷　〒726-0013 広島県府中市高木町840-2